

---

# Eyes ~ アイズ ~

沙風

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Eyes アイズ

### 【Nコード】

N4608A

### 【作者名】

沙風

### 【あらすじ】

世界は、封印する側・ホーリーナイツと解放する側・イビルナイツとで対立していた。世界はイビルナイツが解放した魔物で溢れ返ってしまった。そんな世界に生きるアスカ・シンクレアは一人の青年と出会い、ともにイビルナイツと戦う旅に出ることになる。第二部では新たな敵が現れ世界の流れは大きく変化していく。アスカは世界を救うことができるのだろうか？アスカと仲間たちが繰り広げるファンタジーです。

## 第一話　始まり

「・・・やっと到着だな・・・まさかここに来るなんて思ってたけどよ」

「そう言えばここは、あなたの故郷でしたね。それに到着するまで随分と時間が掛かりましたからね。収穫があればいいのですが」

「ふふ、そうだな」

「さて、行きましょうか」

「アスカ　ここは、やめておいた方がいいよ。確かに何かありそうだけどさ」

落ちていた女の子の音がする。

「うつせえよ。なんなら1人で帰れよ。だいたい、クレアがここに行きたい、絶対何かあるって言ったんだろ」　元気な男の子の音が狭い通路に響く。

「そっそっただけど・・・」

そんな会話を続けながら、二人はこの「サンラド遺跡」の奥へ進んでいった。

暫く歩き続けていると内部には日の光が届かなくなり、辺りは真っ暗になっていた。

やっぱり地下は暗いな。そんなことを思いながらアスカは火を灯そうとした。すると、奥の部屋らしきところから光が漏れ出している。

そっと部屋に近づき、中を覗き込むと黒い本を持った怪しげな男がいた。

「あれってもしかして解放の書？」　クレアが自信のなさそうに言う。  
「多分そうだろうな。つまり、イビルナイツってことだ」　アスカがはっきりと言うとクレアがおどおどしながら、戻ろうよと言ったがアスカは軽く聞き流した。

「あいつが何をしているのか、確認しておいた方がいいはずだ」　ア

ス力は少し興奮気味だった。

呆れたクレアはアス力の腕を掴み、無理やり連れて帰ろうとしたが、アス力がその手を振り払った。

その勢いでクレアが、ドスンと鈍い音を響かせながらしりもちをついた。

「誰かいるみたいだな・・・仕方がないここは諦めるか」イビルナイツの男がそう言うと言に持っていった黒い本を開き、開いたページに手を置き、魔力を込めた。すると、本から封印されていた魔物が飛び出した。

「さあ、そこにいる者を始末しておくんだ。あとは貴様らの自由にするがいい」そう言うと言魔物たちはアス力とクレアに襲い掛かってきた。

「やつやばい！！逃げるぞクレア！！」

二人は全力で走った。それを魔物たちが追いかける。

「では、ご機嫌よう・・・」にやつと微笑を浮かべながらイビルナイツの男はすーっと闇に消えていった。

「だから戻ろうって言ったのよ！！だいたい、いつもアス力は・・・」  
「とクレアが言いかけたその時、広間に出た。すると先回りしていた魔物たちがアス力とクレアに襲い掛かった。アス力がふと横を見ると魔物がない通路があった。が、魔物の方が速かった為、その通路に辿り着けそうにはなかった。

「ここまでか・・・」アス力が諦めかけたその時、目の前の魔物が二つに割れ、ボトツと倒れた。

「えっ！？」

「ケガしてないよな？」身長に合わないくらい、大きな剣を持った男が言った。

「はっはい！！大丈夫です」アス力とクレアが同時に言った。

## 第二話　覚醒

「その二人を頼みますよ、ロベルト」槍を持った青年が言った。

「ロベルト・・・？」聞き覚えのある名前だった。その名はアスカがまだ幼い頃によく遊んだ4つほど歳の離れた友人の名だった。だが、はつきりと顔を見た訳でもなかったのでアスカは何も言わなかった。

「わかった、そっちはお前に任せるよ」

「では、遠慮なくいきますよ。皆さん少し下がってください」そう槍を持った青年が言うと同時に「百烈乱舞」っと声が響き渡る。すると辺りの魔物が一掃された。しかし倒しても倒しても魔物が出て来てきりがない。

「くっ！！きりがありませんねえ。しかし何故こんな所に一般人が？」

「どうやらそんな話をしてる場合じゃねえみたいだ。この戦闘でこの遺跡自体の崩壊の可能性があるぞ」

「そうですね。目的の物も手に入りましたし、これ以上戦闘しても意味がないでしょう。私が呪文で道を作りますので合図と同時に駆け抜けてください」その場にいた全員が頷いた。

槍を持った青年が詠唱を唱え始める「燃え上げ爆炎、灼熱の剛火」  
「バーストフレイム！！」

燃え盛る爆炎と激しい爆風が辺りの魔物吹き飛ばした。そして一筋の道が現れた。

「今です。走ってください！！」その掛け声とともに一同は全力で走り出した。

「なんでこんな目にあわなきゃいけないんだよ・・・」アスカが面倒そうな顔で言った。

「文句をいうヒマがあったらもつと速く走れよ」

「わかってるよ。たく散々な一日だ・・・うっうわっ！！」

「いてえ」と言う声が聞こえたと同時にクレアが振り向くとアスカ転んでいた。

「なっなに転んでるのよ!!」クレアが焦りながら言う。

「やつやばい!!ここで死ぬのか?」アスカが諦めたその時、ロベルトが大声でアスカに怒鳴りつけた。

「ボケツがそんなこと言ってねえでさっさと立って走れ!!」

カキンツ・・・剣が弾かれた時の音が響いた。とても嫌な感覚がアスカの胸を過ぎる。

ぼとっ・・・それに続くように何かやわらかいものが地面に落ちる音がした。恐る恐る音がした方を見るとロベルトが立っていた。

「大丈夫・・・か?」弱々しい声でロベルトが尋ねてくる。その時ふと見えたその顔は紛れもなくあのロベルトだった。バタツとロベルトは崩れるように倒れ、アスカが駆け寄る。

「ロベルト!!大丈夫か!!返事してくれよおいっ!!なあわかるか?俺だよ!!アスカだよ!!聞いたら返事してくれよ・・・俺はいつもロベルト・・・お前に迷惑をかけちゃうな・・・」

アスカが目涙を浮かべながら言った。するとロベルトがゆっくりと口を開いた。

「・・・わかってたぜアスカ。最初に会った時にあのアスカだって気が付いてた。大きくなったなあアスカ」微笑みながらロベルトが言った。ロベルトはアスカをかばった際に、魔物に右腕を切り落とされてしまったのだった。重症だった。血が勢いよく吹き出る。

「バカッ死んじまうみたいなこと言ってるじゃねえよ!!止血すれば何とかなるから・・・」

「ああわりの。俺もまだ死ぬと決まった訳じゃないもんな。」  
そう言うのとゆつくりとロベルトの目が閉じた。

「ロベルト?おいっロベルト!!」アスカが問い掛けたが返事はなかった。それを泣きながらクレアが見守り、槍を持った青年がクレアに先に行くように言う。がクレアは動こうとしなかった。アスカの手や服にはロベルトの血がべっとりとついていた。

「・・・おい・・・ロベルトにはな・・・親父より優れたホーリー  
ナイトになるって夢があつたんだぞ・・・その為に沢山辛い目に遭  
って、それでも乗り越えてここまで頑張ってきたんだぞ!!」

アスカがロベルトを抱えたまま言った。

「ロベルトの夢を返せええ!!」勢いよくアスカが魔物の方へ  
突っ込んでいった。

「危険です!! やめてください!!」槍を持った青年は大声で言っ  
たが激怒したアスカの耳にはその言葉は入らなかった。

「だありやああああ!!」一番手前にいた魔物の顔を思いつき  
り殴った。そして次の瞬間アスカが手のひらを魔物達がいる方にか  
ざした。

「うつつわああああああ!!!!」アスカの叫び声とともに  
手のひらから激しい衝撃波のような力が炸裂した。あまりの威力  
に魔物どころか辺りの壁まで消し飛んでしまった。

「ぐっぐああああああああ!!!!」アスカが魔物のよ  
うな声を上げていた。

「こっこの力は超波動・・・」槍を持った青年がつぶやくように言  
った。

「しかしこれは、怒りによる覚醒。このままでは、こちらも魔物の  
ようにされてしまう。それに先ほどの超波動でこの遺跡自体が崩れ  
かけています」重い口調で槍を持った青年が言う。

「ゆるさねえ!!! 全員殺す・・・クロス・・・ころ・・・」狂った  
アスカがそう言い掛けた時、クレアがアスカにぎゅっと抱きついた。  
「もうやめて・・・アスカ・・・」静かにクレアが言った。

### 第三話く蒼き瞳く（前書き）

こんにちは。沙凪です。ついに初小説が連載されました！！今とても楽しく小説を書いています。さて、前回の話ではアスカに秘められた力が目覚め始めました。しかし、力が暴走し、暴れだしたアスカ。それをクレアが止めようとし・・・この後は第三話で。ではどうぞ！！



### 第三話　蒼き瞳

「ゴメン・・・クレ・・・ア」アス力はそう言って倒れた。

「アスカっ！っ！しっかりしてっ！っ！ねえアスカっ！っ！」突然アスカが倒れたのでクレアは少しパニックになっていた。

「大丈夫です。慣れない魔法を使った為に体力を普段より多く消費したんでしょう。暫くすれば目を覚ます筈です。それより今は、ここから脱出することだけを考えてください」槍を持った青年は冷静に言った。

「私がロベルトを、あなたは彼を。さあ急ぎましょう！っ！」

「・・・ここは・・・？」

「おや？目が覚めたみたいですね。・・・アスカさん。」そこにはロベルトと一緒にいた青年がコーヒーを飲みながら本を読んでいた。どうやら助かったようだ。クレアが、既に自己紹介やらお礼やらを済ましたらしくその青年はアスカの名前を知っていた。

「あんたは・・・魔物に襲われた時に助けてくれた・・・人・・・か？」アスカは覚えていた記憶を頼りに、様子を窺うように言った。

「はい。申し遅れました。私はホーリーナイツ第三戦闘部隊所属、地位は部隊隊長及び准将。ルーク・レオンハルトという者です。」

ルークはかなり有名であった為、アスカでさえもその名に聞き覚えがあった。

「ルーク・・・てことはあんたが『蒼龍のルーク』か。蒼き瞳を持つ者の右腕に聖なる龍は宿る、か」アスカがつぶやく程度に言った。この世界ではルークのように蒼い瞳と右腕に龍のようなアザを持つ人間は、歴史にその名を残していると言う事実があったのだった。そして現在ホーリーナイツをまとめている者、つまり現在ホーリーナイツで最も地位の高い『ダーヴァ総司令官』もルークと同様、蒼い瞳と右腕に龍のアザを持っている者一人だった。

「よくご存知ですね、そのとおりですよ」ルークはにこつと笑いながら言った。それがとても嫌味な笑みに見えた為か、アス力は少しムカツとした。

「私たちは任務でこの地方にある封印の触媒の一つ『神槍パラノム』を入手しに来ました。上層部から頂いた情報によれば、サンラド遺跡にあるようでしたのでそこへ向かったら偶然にもアス力さん達に会ったという訳です」ルークは相変わらず嫌味な笑みを浮かべながら喋る。

「それで目的の物は手に入ったのか？」ルークは軽く頷き、コーヒーを一口飲んだ。

「あつそうだ！ーロベルトはどうなったんだ？」アス力が尋ねると、ルークは嫌味な笑みではなく、仲間の無事を喜ぶ優しい笑顔で答えた。

「彼なら心配ありません。すっかり元気になってあなたよりも元気になってますよ。ただ・・・」

「ただ？」

「・・・彼の右腕はもう使い物にならないそうです残念ながら・・・」

「ルークは言った。」

「俺のせいで・・・俺に・・・俺にできることはないのか？」

「ロベルトはあなたと話がしたいそうですよ。彼の部屋は、この部屋の隣の部屋です」

「わかった。ロベルトの所に行つて来るよ。クレアが来たらロベルトの所へ行つたつて伝えておいてくれ」アス力はルークが頷くのを確認し、部屋を出て行った。

そしてルークはまた本を読み始めるのだった。

### 第三話く蒼き瞳く（後書き）

読者の皆さん。第三話お楽しみいただけただしょうか？さて、『ル  
ークに話を聞き、ロベルトの部屋へ向かうアス力。そこでアス力は  
人生を大きく左右する選択を迫られる。』次話「く選択く」お楽し  
みに。

#### 第四話〈選択〉（前書き）

前回、無事に『サンラド』に帰ってくる事ができたアスカ。目が覚めるとそこには、槍を持った青年ルークがいた。彼の話を聞き、ロベルトの話を聞きに行くアスカ。ロベルトの話とは一体・・・

#### 第四話　選択

部屋を出たアス力はロベルトの部屋のドアに手をかけた。

「話ってなんだろうな。もしかして説教かな？俺のせいでロベルトはケガしたんだもんなあ」

アス力はそんなことをつぶやきながら、ゆっくりと目の前のドアを開く。

「・・・おっ！やっと来たか！来るのが遅いからあのまま死んじゃったかと思っただぞ」

ロベルトは、笑いながら言った。しかし、その笑顔には少し悔しさが紛れていた。

「あつあのさつ話って何？」

「いやさあ！お前の事だから『俺のせいだ』とか言ってるんじゃないかな？って思ってたさ」

図星だ！！ほんの数分前に言った言葉だ。アス力は心の中で驚いた。

「その顔はどうやら俺の言ったとおりだったかな？」相変わらずロベルトは笑っている。

「そんなことないよ！さつ、本題に入ろうぜ」無論棒読みだった。

まだ笑っているロベルトは少しずつ話を始めた。

「もう聞いたかもしれないけどよ、俺の腕さ、肩から落とされちまったからよ使い物にならないんだとさ」その言葉にアス力は何も言えなかった。

「俺の夢知ってるよな？俺のオヤジ以上に優れたホーリーナイトの『英雄』になるってやつ」

ロベルトの父親は、元ホーリーナイト第五戦闘部隊部隊長であり、『英雄』と呼ばれた戦士だった。

しかし、六年前任務中に殉職してしまった。それをきっかけにロベルトはホーリーナイトに入隊することを決意したのだ。アス力は頷き、話の続きを聞き続けた。

「けどよ、もう剣が握れないんだ。この手ではもう・・・」  
「・・・」

「だからさ、アスカ。俺の代わりに『英雄』になって欲しいんだ。俺の代わりにイビルナイツの奴らぶっ倒して、魔物達もぶっ倒して世界に穏やかな時を・・・」ロベルトが話している途中でアスカがしゃべった。

「いやだっ！！俺は・・・俺は・・・」アスカが何かを思い出すような言い方で言った。

実は、アスカの父親もホーリーナイツ戦闘部隊に所属していたのだ。しかし、ロベルトの父親同様、同じ任務で亡くなっていた。それ以来、アスカはホーリーナイツを自然と避けていた。

「お前の気持ち、わかるよ。だけど、俺の気持ちもわかって欲しい。急がなくていい、ゆっくり考えてからお前の返事を聞きたい。決心がついたら俺のところへ来てくれ」

その後、部屋を後にしたアスカはお気に入りの芝生の生い茂る丘にいた。ここは砂漠の町なのだが、なぜかこの場所だけ緑があるのだ、オアシスと言ったところだろう。

「父さん・・・俺、どうしたらいいのかな・・・」

「ああ・・・やっぱここにいたあ・・・」クレアが後ろから声を掛けてきた。

「なんか用か？」考え事をしていたせいか、妙に冷たい反応だった。「ひつどゝい、心配して搜してたのに。どうせ何か考え事でもしてたんでしょ？」

「・・・うん。」

「やっぱりなあゝ。今日はもう遅いし、明日は学校あるんだから帰ろうよ、ね？」

「そう、だな・・・」

帰宅したアスカは遺跡に行った事やら帰宅時間が遅いやらと母親に1時間ほど叱れたのだった。

起床したアス力はいつもどおり着替えを済ませ、学校へ登校した。

「なんかいつもと違うように感じるな、日常が」

「おはよっアス力！！」何故こんなに元気なんだ？とアス力は思った。

「今日学校終わったら私に部屋に来てねえ」

アス力は曖昧な返事を返し、学校へ向かった。

学校ではアス力がクレアとイチャついてるなど、アス力には勿体無いなどそんな話が絶えなかった。

クレアは男子受けがよく、大人っぽさが魅力的らしい。しかし、アス力はクレアの髪の毛の色のほうが好きだった。自分でもよくわからないのだがあの銀髪のサラサラ感がいいとか。

無論それどころではないアス力にとってそんな話は耳に入らなかった。それどころか授業すらはいつていない、いつものことなのだが学校も終わりアス力はクレアの家に行き、クレアの部屋のドアを2回ノックし、部屋に入った。クレアは自分のベッドの上にちょこんと座っていた。

「遅いつてば！！」ムスつとするクレアにアス力は謝った。

「なんか用でもあるのか？」アス力は急かすように言った。

「ホーリーナイツに入らないか？って言われて迷ってるんでしょ？私聞いてたんだあの会話」

「……………」アス力は少し黙ったまま窓の外を見つめた。

#### 第四話　選択（後書き）

クレアに誘われ、クレアの部屋に訪れたアスカ。クレアと相談し、ついに決断したアスカ。果たしてアスカの返事は？次回『決断』  
お楽しみに。



## 第五話　決断（前書き）

放課後クレアに呼びだされたアスカ。クレアに悩み事を相談し決心する、ロベルトへの返事はどうなるのか？

## 第五話　決断

「ねえアスカ。アスカの気持ちはどうなの？」黙っているアスカにクレアが問う。

「俺は・・・わからない。正直言つとどうすればいいのか、俺自身にもわからない」

「アスカのお父さんは任務で死んだ。だから自分もそうなっちゃうんじゃないか。自分も死んじゃうかもしれない。だからホーリーナイツに入ることが怖い。そうでしょ？」

「・・・うん・・・」

「でもあなたを今必要としている人がいる。ロベルトがあなたに、アスカに頼んだ理由わかるでしょ？ロベルトがホーリーナイツに入ることが拒んだあなただから、親友だからロベルトはあなたに頼んでるのよ。わかるでしょ？」クレアは泣きそうだった。

「俺は、あいつの夢を奪った。そんな奴にあいつの夢を背負うなんてできないよ」

「でもアスカがロベルトを止めたのは、ロベルトを死なせたくなかったからでしょ。それは、ロベルトだって同じだよ。ロベルトだって誰も死なせたくなかったから、イビルナイツと戦うことを決めたんだよ。自分が戦って、アスカを、皆を守りたかったんだよ。だから、今度はアスカが皆を守ってあげる番なんだよ。私も、アスカが挫けそうになったり、苦しくなったり、辛くなったりした時は支えてあげるから、助けてあげるから、一緒に世界を守るう、ね？」その言葉はアスカの心にぐつと来た。

アスカは無言のまま部屋を出ようとした。

「アスカ！！」クレアが大きな声を張り上げた。するとアスカは首だけを振り返らせ言った。

「ばーか、お前なんかじゃ支えきれねえーよ。ロベルトのところに行って来るよ、それで言つてやるよ『俺に任せろ』ってな」にこつ

とアスカは笑い部屋を出て行った。

「…………告白だったのに…………」っとクレアはアスカが出て行った後、ボソつと言った。

誰かが勢いよく走ってくる。バンツ！！ドアが開くとアスカが入ってきた。

「よっ！！決まったのか？」ロベルトが真剣な眼差しで問い掛けた。  
「ああ、もちろん。俺はホーリーナイトに入る」アスカはロベルトの問いにすぐに答えた。

「俺に任せるよ！！俺が、ロベルトのオヤジさんを超えた英雄になつてやるからよ！！」

アスカの覚悟は本物だった。ロベルトはホツとした顔でルークを見た。

「それはよかった。私もロベルトがなくなってしまうと暫く任務を一人でこなさなくては、と思いましたよ」さらっとルークが言った。  
出ました必殺『嫌味な笑顔』心の中でアスカがつぶやいた。

「そうだったアスカ。これお前にやるよ！！俺からの餞別だ受け取れ」  
ロベルトはそう言うと言壁にたてかけてあった、大きな大剣をアスカに渡すようルークに言った。

「これって、ロベルトの父さんの形見の剣なんじゃないのか？そんな大切な物もらっていいのか？」

「いいんだ。もう俺には必要ない、それにこの剣だって飾られてるより使われてる方がいいだろ」

「でも…………アスカはロベルトに悪いような気がした。」

「受け取ってあげてください」ルークがそう言うと言アスカが剣を握り、ロベルトに言った。

「ありがとう、ロベルト」

「大刀『竜王』…………ボソツとロベルトが言った。

「え？」アスカにはその言葉がよく理解できなかった。

「その剣の名前、大剣って言ってるけど大刀に近いんだそれ」ロベ

ルトは笑った。

「へえ」。じゃっよろしくなっ『竜王』!!」アスカは元氣よく挨拶した。

すると、ルークがポケットから眼鏡を出し、それを掛けてクイツと中指で持ち上げた。

「そういえば、ルークって眼鏡なんか掛けてたっけ？」

「えっはいまあ気分で掛けたり掛けなかったりですよ。明日から1週間あなたに戦闘の基礎を教えるには、この方がそれっぽいと思います」ルークがそう言うのとロベルトは横で笑っている。

「じゃあルーク、アスカをビシバシ強くしてやってくれ。まあなんだ、できることならその窓から見えるところでやってくれ、アスカのやられっぷりが見たいからな」ロベルトは言いたい放題言っただけまた笑い始めた。こうしてアスカの特訓が始まるのだった・・・

「アスカ・・・頑張ってね」クレアがドアに手を触れながら、中にいる三人には聞えないくらい小さな声で言い、その場を立ち去った。

## 第五話　～決断～（後書き）

ホーリーナイツに入り、ルークとともに旅をすることに決めたアスカ。出発の前に修行することになったアスカは乗り越えることができるのだろうか？そしてどんな修行なのだろうか？次話『旅立ち』

## 第六話　旅立ち（前書き）

ルークに基本戦術を学ぶように言われたアスカ。そしてルークと訓練をすることに。

## 第六話　旅立ち

家に帰ったアス力は、親に入隊することを告げ色々と言われたがなんとか許しを得た。

「ああゝゝどんな訓練するのかな。やつぱ大変なんだろうな・・・まっ頑張らないとな!!」

そう言っアス力は、明日の訓練に備えて眠りについた。

「さて、始めてもいいですか？アス力君」  
「いつでもいいぜ」

翌朝になり、いよいよ訓練が始まった。

「まずは、構え方を教えます」

「おう!! 教えてくれ」

「私と同じ体制をとってみてください」

「こっこうか？」

「もう少し脇をしめてください」

この日は、構え・受身・防御・その他の戦闘知識を教わり終了した。三日ほど、同じような内容でルークと修行したアス力。そこへロベルトが付き添いの看護婦と歩いてきた。

「どうだ？しっかりと身についているか？」

「まあ最初に比べればよくなってますねゝまだまだ未熟ですけど」

「うっせえなゝまだ始めたばかりなんだから未熟で当然だろう!!」

「じゃあそろそろあの技教えてみるか？」

その言葉にアス力は、新たな楽しみを感じた。

「あの・・・技？」

「そう。俺とルークの共同開発の技だ!! その名も『龍波』だ!!」  
「ならさっさとやろうぜ!! さくつとその『龍波』ってのを覚えて  
どどん強くなってやる」

アス力は、すっかり強気になっていた。

「まあそう慌てないでください。今から技の説明をしますから。簡単に説明しますと、剣、つまり『竜王』にあなたの『魔力』を込めて、その込めた魔力を斬撃として飛ばすんです」

「おお、なんかよくわかんねえけどすげえー！！」

アス力は、はしゃいでいたが事の重大さにまだ気付いてはいなかった。なぜならアス力は呪文や魔術を自分の意志では使ったことなどなかったのだから。

「アス力魔術とか呪文使えるよな？」

確認の意味を込めてロベルトが尋ねると、アス力はそんなもの使ったことありませんと答えた。

「仕方ありませんね。とりあえずアス力。魔術と呪文の違いがわかりますか？」

「いや、よくわからない」

アス力はルークが自分のことをアス力って呼び捨てで呼んだと思っていたながら返事をした。

「はあ。では、簡単に説明します。魔術と呪文の違いは、発動条件と魔力の消費量です。魔術は術の名前を唱えるだけで、術を発動することが出来ます。ただ、魔力の消費が大きい為、頻繁に使用すると魔力が底を尽き戦闘は愚か、動くこともできなくなってしまう、最悪の場合死に至ります。それに比べ、呪文は魔力の消費が少なく、長期戦に向いています。しかし、呪文を発動するには、詠唱と呼ばれる歌を詠わなくてはなりません。また、歌に込められた意味をきちんと理解しないと呪文は発動しません。それに、詠うことで隙が生まれやすいので個人戦は向きません。まっこんなところですね。わかりましたか？」

アス力は、なんとなくルークの説明が理解できた。

「なんとなくだけど、わかった。で、それがどう繋がるんだ？」

「この間の件でわかったのですが、あなたは体内に大量の魔力を持っているということがわかりましたので、魔術を発動する感覚で『龍波』を覚えてもらおうと思います」



「具体的に何をすればいいんだ？」

「ここに昨夜私が作ったロベルト人形があります。これを刀身を触れずに二つに斬ってください。つまり『龍波』で斬るということです」

「なんで俺の人形なんだよ」

「まあ細かい事は気にしないでください。さつアス力頑張ってくださいね。私たちはそれが終わるまで、何も教えることはないのです。では、頑張ってください」

そう言つて、ルーク達は帰ってしまった。

「よっしゃあ！！さくつと終わらせてやる」

アス力はそう言つて修行に集中した。

三日後クレアがアス力の様子を見ようと先ほど作ったお弁当を持つて歩いてきた。すると、修行をせずに、座っているアス力の姿が見えた。

「何サボってるの。ルークに言いつけちゃうよ」

「サボってる訳じゃねえよ。どうして『龍波』が発動しないのかわからないんだ。ちゃんと集中して刀身に魔力を込めてるのに」

「ねえ。ちよつとやつてみてよ」

クレアに言われてもう一度やつてみるアス力。

「魔力を刀身へ・・・はああ・・・だりやああ！！！！」

またも空振りに終わった。

「ああ。やつぱりでかねえ！！！」

「う。ん。なんでだろうねえ。あれだけ魔力込めてれば何か起きるはずだけど。とにかく、クレアちゃん特製手作り弁当でも食べて、悪い所を考えてみよう」

そう言つてクレアは、持ってきたお弁当を広げた。

「クレアその肉とつて・・・あつそのサンドイッチも・・・うつ

！！肉がのどに詰まった！！飲み物くれ・・・」

「そんなに慌てるからだよ。で、どうおいしい？」

「ん？おう。結構うまいぞ！！また腕を上げたんじゃない？」

「ほんとっ？ありがとう！！あっそうだ、アス力は技を出す時魔術で出すのそれとも呪文？」

「えっ？魔術で出そうって言われてるけど。なんで？」

「魔術なら技の名前言わなきゃダメなんだと思うよ。呪文でも詠唱があると思うし」

「なるほど！！早速やってみるよ」

そう言ってさっと立ち上がり、アス力は剣を構えた。

「集中・・・集中・・・集中・・・『龍波』！！！！！」

掛け声とともに地面を這うように斬撃が飛んだ。

「でっでた・・・」

「うわあ～～ロベルト人形真っ二つだね」

アス力達が成功を喜んでいると、誰かがパチパチと拍手をしながら近づいてきた。

「いや～三日で習得するとは思いませんでしたよ。とにかくおめでとうございます」

それはルークだった。どうやらルークは影からアス力の修行を見ていたようだ。

「急かすようですが、これを。」

ルークはアス力にバッジのような物を手渡した。

「これは？」

「これは、ホーリーナイツ仮入隊の証です。これである程度の身分証明にはなるでしょう。正式な手続きは、ホーリーナイツの本部で行なってもらいます」

「よっしゃこれで俺もホーリーナイツだ！！」

ルークはまだ仮ですよっと言おうとしたがやめた。

「出発は明日の朝。集合はここです。身体をゆっくり休めておいてください」

「おはようルーク！！！！」

「ああアスカ。おはようございます」

ルークは本を読みながらアスカに挨拶をした。

「さて、出発しましょう。目指すは、情報の町『ガルデニア』です」  
「待って！私も行く！！！」

「クレア！！なんでお前まで来るんだよ！！」

「アスカの行く所には、私も行くの！！それに私治療能力持つてるから何かと便利でしょ？」

「どうする？」

「まあいいでしょう。彼女の治療能力は確かに役立ちます」

「よし。じゃあ出発」

クレアの元気な掛け声で一同は町を出た。一同は情報の町『ガルデニア』へ旅立つのであった。

## 第六話　旅立ち（後書き）

アスカは『龍波』を習得し、ついに旅に出た。向かう場所『ガルデニア』はサンラドと違いアスカにとって新世界だった。次話　新世界

## 第七話〜新世界〜（前書き）

龍波を取得したアスカは、ルークに仮ホーリーナイトの証であるバツジをもらった。クレアも旅に加わり、一同は情報の町『ガルデニア』を目指す。

## 第七話　新世界

一同は、砂漠を無事に横断し、草原を切り開いてつくられたガルデニア街道を歩いていった。

「なあルーク」

「はい、なんですか？」

「ルークの槍はいつもどこから現れるんだ？」

「あああの槍はですね、私の体内に流れている魔力を放出し、それをまた魔力で押し固めた物なんですよ。魔力の色は人それぞれ違います。私の場合は金色ですよ、きっと私の心が輝いているからでしょうね」

ルークは、冗談を入れながら話しているが、アスカには冗談に聞えなかった。

「じゃあ俺は何色なのかな？　かつこいい色だといいな」

「アスカは、きっと紅色（赤色）だと思うな。髪の毛も瞳も紅いんだもん、きっと紅色だよ」

「それだったらクレアは、銀色だろうな」

「魔力の色は、魔力で魔力を押し固めてみればわかる筈です。それが、全魔力を放出してみるか。それをやったら死んでしまいますけど」

ルークは笑いながらすごい事を言った。それを聞いたアスカが早速試そうとした。

「無駄ですよアスカにはまだ魔力を押し固めるなんて高度な技術を扱えるとは思えません」

「ちえっ。でもまあそりゃそうだよなあーもつと慣れてから試してみるか」

「頑張れアスカ」

そんな会話を続けていると遠くに町が見えてきた。

「おや、どうやら着いたようですね。情報の町『ガルデニア』が見

えてきましたよ」

町に入った一同の目に飛び込んだ風景は、サンラドとは、まったく違う別世界だった。町には活気が溢れ、道は石でできたレンガがきれいに敷き詰められていた。辺りを見渡せば、レストランやバー、リゾートホテルのようなきれいなビルが建っていた。ビルとビルの隙間を覗けば、奥に、柔らかな日差しを浴びた、木々や草花が生い茂っている場所があり、それがまた、とても神秘的だった。

「す、すげえ」

アスカは、その風景に感嘆の声を漏らした。

「ガルデニアは情報の町として世界に知られています。この町を活用すれば手に入らない情報はないと言われているくらいです」

「つまりね、サンラドの特産品が『砂漠の花』であるように、ここの特産品は『情報』なのよ」

「砂漠の花って、砂の中の鉱物が何年もかけて花のような形になったってやつか？二人とも・・・詳しいんだな。俺の全然知らないことばっかなのに、いろいろと知ってるんだな」

「何言ってるのよ」この間授業で習ったじゃない」

そうだった？と言わんばかりの表情を浮かべているアスカ。いつも授業を聞いていないアスカにとって、そんなことは、ほとんどどうでもよかった。しかし、学校の決まりでホーリーナイツに入ると特別に欠席している日が出席扱いになるのだが、宿題は提出しなければならなかった。彼の荷物の中には、手のつけられていない宿題がどっさりあった。その為、クレアから聞いた話より、宿題をいつ終わらせるかで頭がいっぱいになってしまったのだった。

「そう言えば、クレア。お前学校はいいのかよ、お前はホーリーナイツじゃないんだから無断欠席になるんじゃないのか？」

アスカは学校からも許しを得ていた為、欠席していても支障はなかったのだが、クレアは別だ。彼女は無理を言っについてきてしまったのだから。普段そんな強気な行動をとる事は少ないのだが、アス

力が、からむと見境がつかなくなることがある。ケガをした口ベルトの治療をしてくれたのが、クレアの両親だったと言ったこともあり、ルークもクレアの同行を簡単に許してしまったのだ。

「大丈夫。きつと先生ならわかつてくれるよ!!」

「何の根拠があつてその答えが出て来るんだよ」

楽しそうな会話をする二人を、そつと微笑みながら見守るルークが口を開いた。

「あつここです」

「どうした？ルーク」

「ここが、ホーリーナイトガルデニア支部への入り口です」

「えっ？ここが・・・」

それは、今までとは打って変わって、今にも崩れてしまいそうな廃墟のような所だった。



## 第七話　新世界（後書き）

廃墟に入ると、外とは比べ物にならない風景が広がっていた。アス  
力は、そこである人物と初めて会うことになる。  
次話　対面

## 第八話　対面　（前書き）

ボロボロな建物の前へやってきたアス力達。そのボロさに少し戸惑うが、足を進めるアス力。

## 第八話　対面

「なあ、ここが、いくら支部だからってこの有り様はひどくないか？風が吹いたら今にも崩れちまいそうだなぞ」

アス力は、心の中で思ったことを素直に口にした。

「まあ大丈夫ですよ。かれこれ50年近く経ちますが、崩れたことはないそうですから」

本当かどうかはさて置き、アス力とクレアは不安を抱いたまま、ルークについて行った。

「ここです」

ルークが突然立ち止まり、アス力達を呼び止めた。

「ここですって、何もないじゃないか」

アス力が疑問を抱いていると、ルークは近くにある岩に手を触れた。すると、岩肌からインターフォンのようなものが出てきた。

「暗証番号とHKID（ホーリーナイツ隊員ID）を入力してください」

「ピ、ピピピ、ピピ、ピピピピ、ピ……暗証番号確認……  
……HKID確認……ハッチを開きます」

地面が隆起してくると、そこに地下へと続く階段が現れた。

「うつひゃあ、無駄にすつげえ」

アス力は驚いているのか、馬鹿にしているのかよくわからない反応をした。

「さっ中へ入りましょう、と、その前に今からお会いする方はとんでもえら〜いお方なので無礼のないように十分に気を付けてください……とくにアス力。あなたには礼儀が足りませんので一番心配です。あなたの言動で私の地位や給料が下がったら魔術やら呪文やらで黒焦げにしますからね」

「名指しかよ!!」

アス力は口ではそう言っているが心の中では、本気だ!!笑ってる

けど目が本気だと思った。

数分歩き続けているとモニタールームのようなところに辿り着いた。

「モニター、ラムダ元帥に繋いでください」

「リヨウカイ・・・ツウシンチュウ・・・カイセンツナガリマシタ」  
回線が繋がると、モニターには、一人の男を映し出した。

「どうやら一つ目の任務を完了させたようだな。ご苦労だったな  
ルーク、早速報告を聞かせてくれ」

モニターに映ったのは、ラムダ元帥という男でホーリーナイト特殊  
議会、情報部代表及び、第八戦闘部隊部隊長を務める、上層部の人  
間だ。見た目は、「かつこいいおじさん」といった感じた。髪は短  
めに刈りそろえてあり、口にたくわえたヒゲがダンディーで、偉そ  
うな雰囲気漂わせている。

「無事に『神槍パラノーム』を入手しましたが、任務中ロベルトが  
負傷しました。幸い命に別状はありませんが、ホーリーナイトとし  
て今後活動することは不可能だと、現地の医師に診断されました。  
そこで私は、ロベルトの代わりに、こちらにいるアスカ・シンクレ  
アを任務に同行させようと思います。これは、ロベルトの意思でも  
あり、彼自信には自覚はないのですが超波動を起こすほどの魔力を  
秘めています。これは大きな戦力に成りうる可能性があります。よ  
ってアスカ・シンクレアを仮ホーリーナイトに任命したいと考えて  
おります」

ルークがながい報告を終えるとチラッとアスカを見て、視線をモニ  
ターに戻した。

「そうか。ロベルトが負傷してしまったか。彼ほどの戦力を失うの  
は痛いぞ致し方あるまい。ルークよ、超波動はかなり強力な戦力で  
もあり、危険な存在でもあるのだ。十分に注意するのだ」

「了解しました。アスカ・シンクレアのことはお任せください」

「時に、そこにいるお嬢さんはどちらさんかな？」

ラムダもやはり気になっていたのか、話しながらクレアを見続けて  
いた。

「そっそんなに見つめないでください・・・恥ずかしいですってか照れます・・・」

クレアは何故か照れ始めた。どうやらクレアはダンディーなオジサマも好みらしい。一番はアスカだが。

「彼女は・・・」

ルークは言葉に困ってしまい、ゆつくりとクレアの方を向いた。

「あっ、えっと、わた、私はクレア・ローズベルトと言います！！ちっ、治癒能力があるから・・・じゃなくてありますので、無理を言ってルーク准将に旅の同行許可を得ました」

クレアは、緊張のあまり、言いたいことがうまく言えなかった。

「なるほど、治癒能力か・・・それは珍しいな。魔力で直接傷を治療することができるの者は、あまりいない。呪文や魔術とはまた別の類だからな。是非とも、ホーリーナイツに入隊してもらいたくないだ。さて、報告はもう無さそうだな。次の任務にあたってくれ」

「了解しました」

プツンという音とともに、通信が切れた。クレアがふとルークの方を見ると、ルークがクレアの事を無言でじっと見つめていた。

「なっ何ですか？」

じっと見つめられていたせいか、クレアはちよつと赤くなっていた。

「いえ、何でもありません。ただ、正直今でも驚いています。治癒能力なんて珍しい能力は滅多に、お目にかかれませんか。それにあの場にあなたがいなければ、ロベルトは、助からなかったかもしれません。私は、治療系の術や呪文を知りませんから」

「そんなに珍しいのか？治癒能力ってさ」

「かなり珍しいです。私も沢山の人と出会ってきましたが、治癒能力は初めてかもしれません」

初めてではないんだ・・・クレアはそんなところに頭の中でツツコミを入れた。

「まあ、とにかく上からの許しが出たので、一安心ですね」

ルークはニコツと笑った。

「それでは、ホテルへ行きましょう。次の行き先の話は、そこです  
ます。休憩を入れてませんでしたから、今日は早めに休みましょう」  
こうしてアスカは仮ホーリーナイトとしての行動許可を得たのだっ  
た。そして一同はホテルへ向かった。

## 第八話　対面（後書き）

ホテルへ向かい、休むことに。すると、誰かがクレアの部屋へやってきた。一体誰が部屋を訪れたのだろうか。次話『攻撃の術』

## 第九話　攻撃の術　（前書き）

アスカとクレアはそれぞれ上層部の人間から許可をもらいついに、本格的な旅をすることに。そして一同はホテルへ向かうのだった。



## 第九話　攻撃の術

ホテルのロビーへ着いたアスカ達は、部屋の予約を入れた後ホテルの付近にある喫茶店へ来ていた。

「次の行き先のことなんです、話してもいいですか？」

ルークは話すに話せなかった。なぜならアスカがとても眠そうにしていたからだ。アスカがはっとして、我に帰った瞬間にルークは透かさず話を始めた。

「次の任務は、封印の触媒の一つ『エンシェントアックス』の入手です。その為に、エターナルへ向かいます」

「エターナル？」

「はい。時の町『エターナル』、とてもいいところですよ。出発は、明後日になりますからそれまでは、ゆっくりしててください」

「どうやらホーリーナイツには休みが少ないらしい。アスカはこれから始まるであろう冒険にわくわくしている自分がいることに気が付いた。」

その日の夜、「コンコン」誰かがクレアの部屋を訪れた。アスカだ。たらないな、そんなことを思いながら声をかけてみる。

「どなたですか？」

「ルークです。少し話があるのですが、時間いただけますか？」

「えっ？はい。どうぞ入ってください」

アスカでなかったことに少し残念そうな表情で、ルークを部屋に入れた。

「失礼します」

部屋に入り、ルークがイスに腰掛けるとクレアは飲み物を用意しながら尋ねた。

「どうしたんですか？」

クレアがにこっとしながら飲み物をルークに差し出し、自分もイス

に座った

「この先のことなんですが、治癒能力だけでは恐らく生き残ることは困難だと思います」

ルークがさらつと言った。クレアは無言でルークを見つめた。

「いきなりなんです、私があなたに呪文を教えます」

「えっ！？でも、私呪文なんて使ったことありませんよ」

戸惑いながらクレアが言った。

「大丈夫ですよ。私が責任を持って教えますから」

ルークが優しく言った。

「……じゃあ、お願いします」

では、始めますか。そうルークが言つと、クレアは少し驚き、今から？と言わんばかりの表情を浮かべた。

「何を驚いているんですか？今しか時間がないんですから、早く準備して外へ行きましょう」

「えっでも……」

「明日は、アス力とこの町をデートするのでしょうか？なら早く済ませて休みましょう」

そしてルークが呪文を教え始めた。

「あなたは元々魔力の量が少ないので、魔力の消費を抑えることを基本としてやっていきましょう」

こうしてルークに呪文の基本をみっちり叩き込まれたクレアは、クタクタになりながらも練習を重ねた。気が付くとすでに夜が明けていた。

「もう一度言っておきますが、呪文は『詠唱』に込められた『意味』を正しく理解しなければ発動しません。ですから少しずつ正しい意味を理解していくといいでしょ」

「はい！！わかりました。今教えてもらったこの光属性の呪文『フラッシュニードル』はなんとなく理解できたと思います」

「それはよかった。実戦で成功することを祈ってますよ」

さわやかな笑顔でルークが言った。それを聞いたクレアもクスツと笑う。

「では、今日のところはもういいでしょう。すっかり夜が明けてしまいましたし、これで失礼しますね。あつそれから一つ忠告しておきますが、闇属性の呪文と魔術はなるべく使用しないでください。身体へ悪影響を及ぼす危険があるそうですから。まあ今回は教えませんでしたが、いずれ知る時が来るでしょう。それと、呪文と魔術はほとんどが術者のオリジナルです。わずかな基本魔術と呪文以外はほとんどオリジナルのほずですから、敵の術や呪文の見切りはかなり困難になります。ですから十分に気を付けてください。ちなみに『フラッシュユニードル』は私のオリジナルです」

「わかりました！あの日今日は本当にありがとうございました」「いえいえ、これくらい当然です。それからもつと言葉を崩してもらってくださいか？『仲間』なんですから。さて、あなたも疲れたでしょう？ゆつくり休んでくださいね。では、失礼します」

その言葉に、クレアは少しホツとする自分を感じた。そしてルークは自分の部屋に戻っていった。

「さあ〜と、寝ますかあー！ー！！」

クレアはようやく眠りについた。空から降り注ぐ太陽の光が、クレアをそつと包んだ。

それから五時間ほど経ち、アスカがクレアを起こしに来た。

「クレア〜入るぞ〜」

返事が返って来ないうちにアスカが部屋に入る。

「うわっ散らかってるな〜着替えた後絶対片付けしてないなコイツ」アスカはぶつぶつ言いながら何故か部屋を片付けた。一通り片付け終わり、クレアを起こそうとした。

## 第九話　攻撃の術（後書き）

ルークに攻撃の術を教わったクレア。それをアスカに披露しようとするが。次話『お披露目』

## 第十話　お披露目（前書き）

クレアはルークに呪文を叩き込まれ、クタクタになった。クレアが寝ているとアスカがクレアを起こしに部屋へやってきた。

## 第十話　お披露目

「おい。起きろ。今日は町を見て回るんだろ。」

「・・・まつ待つてえ。ルークうう。」

クレアの寝言にアス力は少し驚いた。

「なんでルークの夢見てんだあ。コイツ・・・」

「私にはまだそんな呪文使えな・・・ああアス力！！道に落ちてた物なんか食べちゃダメだよお！！」

「何の夢見てんだよ・・・てか俺そんなことしねえってのっ！！」

アス力はムスツとした。そしてアス力はクレアの頬をつねりながら耳元で怒鳴った。

「起きろっての！！」

大声で起こされたにもかかわらず、クレアはゆっくりと目を開けた。

「ん。もう朝？」

「・・・カワイイ・・・」

クレアの目を擦っている寝起きの顔を見てアス力はドキドキしてしまった。

「ふああ。オハヨ。アス力・・・」

「おっおう！！オハヨッ！！」

アス力はビクツとしながら答えた。

「ふあ。ねむう。もつと寝ていたいよ・・・」

「んあ？何言つてんだよ。さつさと着替えて、メシ食って来い」

うんつと頷き、クレアは着替えを始めた。

「バカッお、俺の前で着替えるな・・・ハ、ハズカシイ・・・」

照れながら言いつつも、クレアからは目を離さないアス力であった。

「あつゴメンゴメン。アス力は男の子だもんね」

笑いながらクレアが言った。

「んじゃあ、先にロビーに行ってるから支度が終わったら来いよな」

「はあ。いい」

その返事を聞き、アスカは部屋を後にした。

「あいつ・・・胸でかかったな・・・」

アスカは顔を赤くしながら、つぶやいた。

一時間ほど経つ頃に、ロビーにクレアが来た。

「おせえゝつての!!」

「ゴメンね」

「ほらっさっさと行くぞっ!!」

二人は町へ歩き出した。

「アスカとデートなんて久しぶりだなあゝ」

クレアは、にこにこしながら言った。

「はあ?何言つてんだ?この間遺跡に二人で行っただろ」

「あんなのデートって言わないよ!!」

「同じだろ?」

「違うよ」

なんとも言えない会話が続く・・・

何時間か町を見て回った後、アスカとクレアは広場に来ていた。

「あっそうそう、ルークにねゝ呪文教えてもらったんだよ」

「おゝすげえな。ちよつと見せてくれよ」

「もちろん。見ててよゝ」

クレアは大きく息を吸い込み、詠唱を唱えた。

「光れ閃光、彼の者を貫き給え!!『フラッシュニードル』」

すると目の前に豆電球のような弱々しい光がパツと光っては消えていった。

「・・・んまあゝこんなもんだろっ?」

「しっ失敗しただけだよ!!」

「そっそっということにしておくよ・・・」

「よし、もう一回!!」

再び、クレアは詠唱を唱え始めた。まだやるのかよ・・・アスカは心の中でつぶやいた。

「光れ閃光、彼の者を貫き給え！！『フラッシュユニードル』」

今度はちゃんと発動したのだが、それはアスカの方へ勢いよく飛んできた。

「うわってめえクレア！！どこ狙ってんだよ！！あぶねえだろ」

そう言いながら、アスカは肩にかけていた『竜王』でクレアの放った呪文を弾いた。

「大丈夫？・・・あの・・・ゴメンなさい」

「まっクレアの事だから何かしでかすとは、思ってたがまさか俺に向かつて攻撃するとは思わなかった」

「ロベルトにもらったその剣、アスカにすっかり馴染んでるね！！」

「そう、だな・・・」

アスカは少し暗い口調で返事をした。

「そろそろ帰ろうか。明日早いし」

「ああ、そうだなっ！！今日はクレアのせいで疲れたから早く寝ようっ」と

「うううひどいい。わざとじゃないんだから許してよ」

二人はデートを満喫し、宿へ仲良く帰っていった。



## 第十話　お披露目（後書き）

二つ目の封印の触媒『エンシェントアックス』の入手の為、一同は時の町『エターナル』へ向かう。次話『時の町』

## 第十一話　時の町（前書き）

クレアとのデートを楽しんだアスカは、ルークに早く寝るよう言われ休むことに。そして一同はエターナルへ

## 第十一話　時の町

「お帰りなさいお二方、明日の出発は朝早いのでなるべく早めに休んでおいってください」

ルークはいつもどおり本を片手にさらっと言った。

「じゃっ明日の朝、支度が出来次第ロビーに集合。それからエターナルへ向かおう」

「了解！！アスカ、ルークおやすみ」

「明日は自分で起きろよ、クレア」

「わかつてるよ」

アスカの言葉に頬を膨らませながらクレアは部屋に向かった。

「相変わらず仲がいいですねえ」

「ん？そうかあ？」

「はい。とても仲がよく見えますよ」

「ふん。まあいいや。じゃあ俺も疲れたし、もう寝るよ。ルークも早く寝ろよ」

「わかつています。コーヒーを飲み終えたら寝ますから」

「じゃあ、おやすみ」

アスカは部屋に戻り、眠りについた。

午前六時頃出発したのにエターナルに到着した時には、午後二時を過ぎていた

八時間以上歩き続けたアスカとクレアは、げっそりとしていた。ルークは仕事柄こういう事に慣れてしまっているのか、一人平然としている。

「とりあえず、どこかで昼食をとりましょう」

ルークの一言で、三人は近くのレストランへ入った。

「・・・落ちつかねえー。なんか落ちつかねえー」

店内を見回しながらアスカが言った。それもそのはず、店の壁一面

には様々な時計が並べられていたのだから。

「エターナルでは『各家庭及び、職場には最低50個以上の時計を置かなければならない』と言う、法律に近い決まりがあるんですよ」  
「へっ？50個もお！？そんなにあっても意味ないんじゃないかなあ」

「まあ意味があるかどうかは、ここに住む人達が決めることです。部外者の私達がどうこう言う問題ではないでしょう」  
ルークの意見は、大人だった。

町を見渡せば、時計が必ず目に入る。しかしその時計は時計とは思えないほど可愛らしいデザインの物や、落ち着いたやさしい音のする時計まであり、ルークの言ったとおりいい町だった。

「時計ってなんだか奥が深いなあ」

町を散歩した後、喫茶店に場所を移した三人はこれから向かう場所について話し始めた。

「まず、これから私達が向かう場所について話しておきましょう。」

「・・・ここです」

ルークはテーブルの上に広げた地図の一点を指差した。

「ここへ来る途中に見えたと思いますが、この場所は町の中央にある時計塔です。高さなどは未だにわかっていませんが、とてつもなく高いです」

「ここに『エンシエントアクセス』があるんですか？」

「はい。以前『エンシエントアクセス』を回収しに来た隊は最上階で入手することが出来たそうです。しかし、その前の隊がここへ向かった時は最上階にはなったそうです。それに厄介なことにこの塔は、内部が巨大な迷路になってるんですよ」

「迷路？」

「おそらく最上階まで続いているのでしょう。それに先代の任務の結果から『エンシエントアクセス』のある場所は毎回変わっているみたいです」

「は、果てしねえ・・・」

アスカがボソツと言った。

「確か、本で読んだことがあるんだけど・・・」

クレアが視線を宙にさまよわせながら言った。

「迷路って片側の壁に手をつけながら進めば、八割の迷路はゴールに辿り着けるって書いてあったような気が」

「残念ですが、この迷路はその方法ではゴールに辿り着けない残り二割の方です」

ルークが深刻な顔で首を振った。

「あの迷路はですね、常に変化し続けているんですよ」

「変化？」

「時が経つとともに迷路の形が変化するんですよ」

「そんな・・・どうやってたら攻略できるのよ、そんな迷路・・・」

クレアは口に手をあてた。

「事実ですから仕方がありませんよ。おそらく魔法でしょう」

「なあちよつと疑問があるんだけどさ」

アスカがルークに尋ねた。

「先代のホーリーナイトの隊員は入手できたんだろう？なんでその人達からのヒントとか攻略法がないんだよ？」

「それはですね、イビルナイトのスパイや裏切り者がその情報を盗聴など出来ないようにする為に、以前お会いしたラムダ元帥や先代の情報部代表、つまり、情報部総司令官に、その任務を行った小隊の隊長が直接報告するからですよ」

「じゃあ、どうすりゃいいんだよ」

「そこでですね私なりに考えて、もう手は打ってあります」

困った様子のアスカにルークがにこつと笑って見せた。

## 第十一話　時の町（後書き）

時計塔に向かうことになったアス力達。ルークの策である人物と行動を共にすることになる。次話『時計塔』

## 第十二話 時計塔 (前書き)

エターナルについて一同は『エンシェントアクセス』の場所について話し合い、時計塔へ。ルークの策とは。

## 第十二話　時計塔

「ここが・・・時計塔・・・」

アスカは上を見上げた、けれど雲で頂上が見えない。

「すっげえゝ迫力。これ一階、一階が迷路になってるんだろう？」

「そのとおりです。これだけの高さがある塔です。一つずつ迷路をクリアしては時間がたりません。おそらく私の考えが正しければ・・・」

ルークは言葉をきった。自分の考えに絶対と言う自信がなかったからだ。

その考えとは、「自分達は迷路をクリアする必要はない」と言うものだった。いくらなんでも一階、一階迷路をクリアしては、きりがない。つまり、『エンシエントアックス』を入手する方法は他にあるのではないか？そう考えたのだ。そこで考えたのは、迷路にかけられた『魔法』をどうするかだ。魔法と言うのは、魔術や呪文とは違い、永続的にその効果をもたらすと言われている。しかし、長時間術者から離れてしまうとその効果は消えてしまう。つまり、術者を倒せば『変化し続け、壊しても再生する』と言う魔法を解くことが出来るのだ。そうすると壁は変化しなくなり、壁を壊しても魔法の効果が消えている為、壁は再生しないのだ。これなら壁を壊しながら進み、簡単に迷路を攻略することが出来るとルークは考えた。

今も尚、魔法の効果は、続いている、魔法が消える気配はない。それは術者がこの塔の中にいるということの意味する。

「要するに、俺達は迷路を攻略することを考えるんじゃないくて、術者を捕まえて魔法を解くことを考えるってことなんだな？」

「はい。私は『迷路の突破』ではなく、『術者の捕獲』こそが『エンシエントアックス』の入手条件だと考えています」

しかし、一つ問題がある。それは、どうやって術者を見つけ出し捕



「らえるか、だ。その事をアスカも疑問に思い、ルークに尋ねた。

「でもさ、迷路の中から人一人探し出すのも、それはそれで大変だぜ？」

「わかっています。その為に彼を呼びました」

ルークが指差した方向には、一人の男がいた。

年齢は、三十代半ばといったところか。タバコをくわえながら頭をかいている、やる気のなさそうなところがアスカと似ていて、アスカ自身親近感を覚えた。

「彼は、ライザ・デイスカスさんです。ホーリーナイツ・エターナル支部で働いている特殊戦闘部隊の方です。彼には、クレアのように少し特殊な能力があるので今回急遽任務に同行をお願いしました」

「どんな能力なんですか？」

クレアの問いに、ライザという男は気だるそうに答える。

「感知能力さ。一定の範囲内に『生物』が存在するかどうかを感知することができる能力さ。護衛なんかに便利な能力だな・・・」

「この能力は今回非常に役立つでしょう」

ルークがにつこりと笑った。

「今回の任務は、彼を加えた四人編成の小隊で行います。準備はいいですか？」

「おう。いつでもいいぜ！！」

「おっと、大事な事を一つ言い忘れていました。この塔内部では、流れる時間の速さが通常の三倍のスピードです。ですから、行動は、迅速且つ、正確にお願いします」

「そんな大事な事はもっと早く言えよ！！」

「すみません。最近物忘れが激しくて。さて、行きましょうか」

ニコツとしながらルークが最初の一步を踏み出した。

「ギイイイイイ」長い間放置されていた為か、嫌な音をたてながら目の前の大きな扉がゆっくりと開いた。

「うわっマジで広い迷路だな・・・こりゃ骨が折れそうだ」

アスカがため息を吐きながら言った。

## 第十二話　時計塔（後書き）

ルークの策で術者を捕らえることに。果たしてルークの策はうまくいくのだろうか？次話『術者』

### 第十三話　術者（前書き）

ルークの策で時計塔の中へ入ったアス力達。その時計塔は、想像以上に広がった。

### 第十三話　術者

中へ全員が入るとルークが口を開いた。

「ライザさん、急かす様で悪いのですが、早速お願いします」

「・・・わかった。少し待っていてくれ」

そう言つてライザは、床に手を置いた。すると、床に魔法陣のようなものが浮かび上がり、ぶわっと風が吹き上がった。

「うっうわぁっ!!」

「大丈夫かクレア？」

「・・・うん、大丈夫。ありがとうアスカ」

「・・・それにしても、こんな広い迷路で術者なんて本当に見つかるのかな？」

「きつとライザさんなら見つけてくれますよ」

ルークが余裕の表情を見せるように言った。

「・・・残念だが・・・」

ライザが重い口調で言った。

「どうしたんですかぁ？」

クレアが尋ねた。

「この塔には・・・人の・・・いや、俺達以外の生物の反応がまったくない」

「バツバカなっそんなはずはっ!!」

珍しくルークが動揺している。

「つまり、ルークの前想は外れて『エンシェントアクセス』の入手が困難になった。しかも帰り道がすでに、変化してなくなっている為、生きてここから出ることすら、難しい・・・ってどうすんだよ!!」

「ただ、なにか・・・なにかを感じる。今はそれしか・・・」  
ライザの言葉にアスカが反応した。

「ルーク、俺考えたんだけどちょっと聞いてもらえる？」

アスカが何か思いついた様だ。

「何ですか？」

ルークはパツとしない顔でアスカを見た。

「ライザさんの言う「なにか」は俺も感じるんだ。しかも、前にも感じたことのある。その感覚は、『神槍パラノーム』と同じ感覚だ。だからその「なにか」ってのは、もしかすると・・・」

アスカの言葉にルークが表情を変えた。

「『エンシエントアックス』・・・」

ルークとクレアがつぶやいた。

「それなら、そのなにかに向かって進むのが一番だろう」

「そうですね。では、その「なにか」に向かって進みましょう」

ルークがようやくいつもの冷静さを取り戻した。

一同は、感じる力を辿り、さまよっては、階段を上がり、を繰り返す数時間が過ぎた。

「ねえ、アスカ、まだ着かないの？もうかなり時間が経ってるよ」

「」

そうクレアが言った。すると、アスカが急に立ち止まった。

「おい、あれなんだ？」

ルークがそれに近寄っていった。

「これは・・・古代文字ですね」

そこには、古代文字が刻まれた石碑があった。

「クレア、あなた確か学校で古代文字の読み方など学んでいますよね？すみませんがこれを声に出して読んでみてください」

「了解。ええ、つと・・・これは・・・」

クレアが解説に入ると辺りに緊張感が張り詰める。

「よし、解説できた。じゃあ読み始めるね」

全員が頷き、クレアが古代文字を読み始めた。

『常識に・・・囚われるべからず、ただひたすら・・・前へ進むべ

し」

クレアが文字を読み終わると、石碑がすくっと消えていった。

「・・・ああわっかんねえー！！さっぱりわからねえー！！」

誰もがアスカが言うだろうと予想した言葉を、アスカは言った。

「まあ深く考えない方がいいですよ、アスカの場合」

「どういう意味だよ」

「そのまんまですよ」

ルークは笑いながら言った。

「さっ先へ行きましょう」

ルークは、笑いながらスタスタと進んでいった。

「まっ待ちやがれ！！」

アスカはムスツとしながらもルークについて行く。それにクレアとライザもついて行く。

数分歩き続けると、道が行き止まりになっていた。

### 第十三話　術者（後書き）

行き止まりにたどり着いたアス力達。引き返すにも引き返せないこの状況を、どう乗り越えるのか。次話　術者（後編）

#### 第十四話　術者（後編）　（前書き）

ルークの予想が外れ、困ってしまった一同。しかしライザとアスカが感じた『なにか』に惹かれる様に進んで行くと、その先には石碑と行き止まりがあった。



#### 第十四話　術者（後編）

「おい、行き止まりに着いちまったぞ」

アス力が面倒くさそうに言った。

「おかしいですねえ。石碑に記されたとおりに、まっすぐ進んだはずなんです……」

さすがにルークも困ってしまったようだ。

「この壁……何か違和感を感じるんだが……」

ライザの言葉に続くようにクレアが言った。

「なんか、如何にも「行き止まり」ですよぉって感じたよねえ」

「はぁ？お前何言つてんだ？こりゃ行き止まりなんだからそう感じるの当たり前だろ？」

「そっそうなんだけどぉ」

自分が言っている事は、常識的に考えれば正しい。それを示そうとアス力は、壁に近寄った。

「いいか？これは見てのとおり壁だ。その証拠に……こうやって壁を叩けば、手が痛くなる……」

アス力が、喋りながら壁を叩こうとすると、手が壁をすり抜けその勢いでアス力は倒れた。

「いつてえええ……ったく、どうなつてんだよ」

「石碑の古代文字の「常識に囚われるな」とは、この事だったのか」「ナイスアス力！！グッジョブッ！！」

クレアが笑いながら言った。

「いやアス力は、本当に何をしでかすかわかりませんねえ」

相変わらず、ルークは嫌味な言い方だった。

「まっお手柄という奴だ」

ライザは、ほめてくれた様だが何故かムカツときた。

全員が一通り言いたい事を言つと、アス力が発見した行き止まりを通って行く。

「ちょっと待てよ!!」

アスカがそれを追いかけて行くと、そこには、真っ白な空間が広がっていた。

「なんか・・・この部屋どこまで広がってるのかわからないね」

クレアが思ったことを素直に言った。

クレアの言ったとおり、ここには壁や天井、床すらも真っ白でどこまでも続く、まるで自分たちが宙に浮いているような感覚になるような場所だった。

「すっげえ綺麗だな、ここは」

「・・・うん」

アスカとクレアは、この部屋の雰囲気ですっかり包まれてしまい、二人の世界に入りかけていた。

「はいはい、いいムードのところすみませんが、任務の続きをしますよ」

いいムードを、一瞬のうちにルークはぶち壊した。

二人は照れながらパツと離れた。そして、アスカは真っ白な空間に見える一つの斧に近づいて行く。

「これが・・・『エンシエントアックス』・・・」

アスカはそう言って目の前にある大きな斧を持ち上げた。

「ブワッ!!」 風が巻き起こり、髪がなびく。そしてすぐに静寂が戻ってくる。

アスカが目の前を見ると大きな扉が現れた。どこかで見たことのある扉。そう、それはこの塔の入り口だった。

「そう言う事でしたか・・・」

ルークが何かに気が付いた。

「どうかしたの？」

「私は、この塔に魔法を使用し続けている術者がいると言いましたが、それは間違いでした」

「どういう事だよ？」

「つまり、この『エンシエントアックス』その物自体が『術者』だ

「つたんですよ」

「・・・この武器が自ら結界魔法を発動し、安全を確保していた。つと言う訳か・・・」

「要するに、今までの迷路と石碑の文字は、俺達への試練だったってことなのか？」

「まあそんなところでしよう」

「とりあえず、任務達成って事だな？なら、さっさと帰って報告済ませようぜ」

「ああゝゝ沢山汗かいたからシャワー浴びたい」

「そうですねゝクレアも何か言い始めましたし」

「何よそれゝルークの意地悪っ！！」

「いえいえ、なんでもありませんよゝさっ帰りましょう」

「ふっ・・・」

ライザが鼻で笑っていたのを、クレアは見逃さなかった。

こうして無事に任務を達成した一同は、ホーリーナイツ・エターナル支部へ向かうのであった。

#### 第十四話　術者（後編）（後書き）

無事に任務をこなしたアスカたちは、エターナルへ戻り、任務の報告をする。しかし、そこで物語は急展開をみせる。次話『展開』

## 第十五話　展開（前書き）

術者の正体は、目的の物『エンシェントアックス』だった。触媒入手の為の試練をなんとかクリアした一同は、その報告の為にエターナルへ。

## 第十五話　展開

「以上で報告は、終わりです」

「そうか、ご苦労様」

「次はどこへ向かえばいいのですか？」

「え、つとね、そのことなんだけど・・・」

アスカたちは、報告の為にホーリーナイツ・エターナル支部通信室に来ていた。ルークはラムダに報告をしようとしたのだが、ラムダが不在の為、アキラ大將に急遽連絡したのであった。

ちなみにアキラは、情報部副総司令官であり、ルークより幼くして出世しているすごい人物なのだ。

「どうかしたんですか？」

「もう触媒集めは、しなくてよくなっちゃったんだよね」

「！！」

「実はね・・・先日他の者にも触媒を取りに行かせただけで、触媒が破壊されていたんだ」

「そっそれでは、魔物の封印も解放もできなくなるのでは？」

「そのとおり。触媒は六つで一つの効果を発揮する。つまり、一つでも欠けてしまえば、十年間程、その能力は失われる。十年経てば、壊れた触媒は復活して今までどおりの効果を発揮することができるんだよ」

「なあ。触媒が破壊されてたのってイビルナイツの仕業なのか？」  
難しい説明を理解しようとアスカは思った事を質問していく。

「いえ、それはおそらく違います。イビルナイツは、触媒から溢れ出す魔力を使って、封印の書に封印されている魔物を解放するんです。しかし、触媒は一つでも欠ければ、その力を失いますから、イビルナイツも魔物を解放できなくなるんです」

「ならホーリーナイツは、どうやって封印するんだ？」

「僕たちは、六つの触媒を全て集めたら上層部の人間がいろんな事

をやつて、この世にいる魔物を一気に封印の書に封印するんだよ」

「つまり、今まで俺達がやってきた事は無駄になるわけ？」

「まあ集めていた物が、不必要になりましたから」

「おいおい、そりゃねえよ」

アスカの顔が一気に暗くなった。

「まあまあ。でも、イビルナイツが魔物を解放できないって事は、これ以上魔物は増えないって事だよ」

「そのとおりだよ」だから、ルーク君達には、この任務をやってもらうことにするよ」

そう言つと別のモニターに詳しい任務の内容が映し出された。

「じゃあ僕は、この後会議があるからこの辺で失礼するよ」

「はい、わかりました」

「なるほどねえ・・・」

「この任務の内容は、『すでに解放されてしまった魔物を倒し、殲滅すること』なんだね」

「はい、そのようです。しかも、魔物を倒しながら、触媒を破壊した犯人も探し出さなくてはなりません」

「手掛かりは、この『白いコート』を着た人つてことくらいか・・・これは情報が少なすぎないか？」

「それなら『ガルデニア』で情報を集めるのはどうかな？」

「・・・それが一番よさそうですね。では、明日の朝この町の入り口に集合して、それから出発しましょう」

「俺の役目はここまでだな」

ライザはそう言つと部屋のドアの方へ歩いて行く。

「ありがとうございました！」

アスカがお礼を言つと、ライザが口を開いた。

「アスカ、この町の中央にある『エターナル・ソード』を、一目見ておくといい」

「え？」

ライザはそう言い残すと、スタスタと歩いて何処かへ去って行ってしまった。

「行ってみようよアスカ」

「そうだな」行ってみるか!!」

「・・・では、行きましょうか」

ルークが少し疲れた顔で言った。



## 第十五話　展開（後書き）

ライザに言われ、『エターナル・ソード』を見に行くことに。そこで一同は『白いコート』を着た人物に遭遇する。次話『ハロルド』

## 第十六話　ハロルド　（前書き）

触媒を集める必要はないと、宣告されたアス力達。次なる任務は、魔物討伐及び白いコートの正体を暴くことだった。

## 第十六話　ハロルド

「なあルーク」

「はい？何ですか？」

「どうしてイビルナイツとホーリーナイツができたんだ？」

「ああ、そうですね、アス力には話しておいた方がいいかもしれませんね」

「？」

「これは、ホーリーナイツに入らないと知ることが出来ないことなので、今後一般市民に、今から言うことは口にしないでください」

「わかった」

「実はですね、元タイビルナイツとホーリーナイツは同じ存在だったんですよ」

「！！」

「ははっ。私も知らされた時は、驚きましたよ。私達の宿敵が元は、同じ存在だったんですから。それはさて置き、400年程前に最強の魔力を持つ『魔王アシウド』がその魔力で世界を支配しつつある時、魔王を倒すべく、魔王討伐隊が構成されました。討伐隊は、自らの命をかけて魔王に挑みましたが、結局敵いませんでした。兵力を失った討伐隊は、ある作戦を考案しました」

「ある作戦・・・？」

「はい。それは、魔物を戦わせるというものでした。人と魔物は、何千年も対立していた存在でしたが、兵力を失った討伐隊は今まで封印してきた魔物を解放し戦わせようとしたのです。しかし、討伐隊の中でその作戦の反対派と賛成派に分かれてしまいました。無論、その作戦は決行されず、魔王を封印する流れになり、なんとか魔王を封印することが出来たそうです」

「それが今のホーリーナイツとイビルナイツになったってことか？」

「はい、まあそんなところです。他にもいろいろあったみたいで

すが、私は知りませんので」

アスカとルークが会話しているところにクレアの声が入ってきた。

「ねえ、あそこに見えるのって『エターナル・ソード』じゃない？」

「はい、そのとおりですよ、クレア」

アスカ達は、それに近づいて行く。

「これが・・・『エターナル・ソード』？すつげえ、剣かと思ってたのに、こんなにボロボロだったとは・・・」

アスカが少しがっかりしていると、クレアが口を開いた。

「何百年もここに刺さったままだったから、しょうがないよ」

「そんなに経つのか？ここに刺さってから」

「はい。魔王を封印した時以来この剣は、ここに刺さったままです。この剣には、恐ろしいくらい魔力を秘めています。そのせいか、この町にはこの剣から溢れ出ている魔力が、漂っているんです」

「へえ」。なんかよくわからなかったけどすげえ」

「はあ、人がせっかく説明してあげていると言うのに、あなたと言う人は・・・」

ルークが深く溜め息をつくとき、アスカが何かを発見した。

「なあ、この窪みは何なんだ？」

「ああ、これはですね、私にもよくわかりません。ただ、この剣を封印した時に使用した何かをはめる所ではないでしょうか？」

「ふふふん」

アスカが納得していると、目の前を白いコートを着た男が通り過ぎた。

「おいっ！あれて・・・」

「白いコート！追いかけてみよう！」

「待つてよ」

白いコートの男を追いかけていく・・・

「おいっ！待てよ、その白いコートを着た奴！」

アスカが大声で呼び止めると、その男はゆっくりと振り返った。

「・・・誰？・・・紅い瞳に・・・蒼い瞳・・・銀髪の女の子・・・  
ああ！！アスカ・シンクレアと愉快な仲間たち見つけ！！」

その男の発した言葉に、一同はキョトンとしている。

「俺っハロルドって言っんだ！！君、アスカだろ？いやぁずっと探していたんだよぉ」

被っていたフードを取りながらハロルドと言う男は、自己紹介をしてきた。

「アスカく知り合いなの？」

「知るかっつてのっ！！初対面だ！！初対面！！」

「何か用ですか？」

ルークが冷静に問い質す。

「実はさ、俺も『白いコート』の連中を追ってるんだよ！！」

「！！」

アスカ達は、その言葉に表情を変えた。

## 第十六話　ハロルド（後書き）

突如現れたハロルドと言う男は、仲間になりたいと言ってきた。ア  
ス力達の答えは・・・？次話　『新たな仲間』

## 第十七話　新たな仲間（前書き）

白いコートを着た男見かけたアス力達は、急いでその男を追いかける。しかし、その男は、白いコートの奴らではなく、アス力達同様白いコートの奴ら追っている者だった。そしてその男は、アス力達の仲間になりたいと言い出す。

## 第十七話　新たな仲間

「今何って言った？」

アスカが聞き直すと、怪訝そうな顔でハロルドが答えた。

「だからあゝ白いコートの奴らを追ってるんだよ」

「・・・じゃあ何で俺達を探していたんだ？」

「えゝっとそれは、君達も白いコートの奴らを探してるってホーリーナイツの人に聞いたからだよ」

「はあゝ？　どういうことだよ？」

「だからね、ホーリーナイツの情報部の人に、白いコートの奴らの情報もらおうと思つて訪ねてみたら、君達がちょうど白いコートの奴らについて調べることになつたつて聞いたから一緒に連れて行つてもらおうと思つたんだ。ほらっ任務同行許可書だつてちゃんとあるんだよ！！　なあゝいいだろゝ連れてつてくれよ」

アスカは困つてしまい、暫く黙り込んだ。

「ねえゝ連れて行つてあげてもいいんじゃない？　仲間は、多い方がいいし・・・」

クレアがそう言うところ、ハロルドが暫く考え口を開いた。

「・・・まあいいでしょう。よろしくお願いしますね、ハロルド」

「よろしく願いしまゝす！！」

ハロルドとクレアが挨拶をすると、ハロルドも挨拶をした。

「・・・アスカも挨拶しなよ！！」

「ん？　あつああ、よろしくなつハロルド！！」

「こちらこそよろしくです！！　アスカ君」

「君付け・・・まあいつか」

「えつとゝこれからは、みんなことを『アスカ君』　『クレアちゃん』

『ハロルドさん』　って呼ぶね！！」

「私はまだ君付けでも大丈夫ですかね？　クレア」

「えっ？　私にそんなこと聞かないでよ！！」



ルークの問いに答えることが出来なかったクレアは、ルークも歳や外見を気にしているんだと心の中で思った。普段の生活や態度を見ていれば、あまり気にしていない様に見えるのが当然だ。一応、実年齢は21歳なのだが、その思想は、35歳くらいなのでそう言われても仕方のないことなのだが。

「でもさうなんで白いコートなんか着てたんだ？」

「これ着ていた方が発見してもらえる確率があがるでしょ？アス力君達も白いコートの奴らを追ってるんだから」

「ああゝなるほど・・・じゃあ何で白いコートの奴らを追ってるんだ？」

アス力が問うと、ハロルドの表情が急に変わった、殺意に満ちた顔へと。

「白いコートの奴らに、俺の両親は殺された・・・だから復讐したいんだ、ただそれだけ・・・」

辺りが一瞬で静まり返った。

「・・・ゴメン、なんか悪いこと聞いちゃったな」

「いや、いいんだよ。いつか話さなきゃいけないことだったから」

「さて、そろそろ宿へ行きましょうか。私達は明日、ガルデニアに向かいます。しっかりと休んでおいってください」

一同は、宿へと足を運んだ。一晩休み、一同は、情報の町『ガルデニア』へ向かうのであった。

「情報を頂けますか？」

ルークの冷静な声が店内に響く。

今4人がいるのは、ガルデニアでも一番情報が集うと言われている大きな情報屋である。

「何の情報が欲しいんだい？」

「『白いコート』について」

店員がぴくりと反応した。

「最近少し噂になってきてるあいつらの事か・・・ふふつ、その情

報は高くつくぜ？」

「構いません。お金なら沢山ありますから」  
その情報は、本当に高かった。

## 第十七話　新たな仲間（後書き）

ハロルドを新たな仲間に加え、一同はガルデニアへ。『白いコート』は、既に情報屋の間では、噂になっているようだった。情報屋でもらった情報には、アス力達には放っておけない情報が載っていた。次話『その情報』

## 第十八話 その情報（前書き）

ハロルドを新たな仲間に加えたアスカ達。白いコートの情報をも求め、ガルデニアへ。そして得た情報には思わぬ記事が。

## 第十八話 その情報

先日、ネフェスの地下に封印されていた触媒のうちの一つ、『暗黒剣・ダークソード』が何者かに破壊されているのを発見した。現場付近では、白いコートを着た人物を目撃したと言う情報が多数報告されて・・・

「目新しい情報はないね」

ハロルドがざつと情報に目を通し、少し残念そうに言った。

「ところでさつネフェスってどんなところなの？」

「夜の街『ネフェス』。月に2回しか昼間が来ない不思議な街です」  
クレアの問いにルークがさらつと答えた。

「じゃあゝ普段からずつと夜つてことか・・・なんか性格暗くなりそう。まあとにかく、白いコートの目撃情報があつたんだからそこに行ってみようぜ」

「そうですねえ、それ以外に行くところもありませんし・・・ネフェスに行く方がいいでしょう」

「待つて!!」

今まで話を聞いていただけだったハロルドが口を開いた。

「まだこの情報続きがあるから・・・」

本日午前5時、ロウグにてホーリーナイトエターナル支部の隊員のライザ・デイスカス氏の遺体が発見され、現場付近では白いコートを着た人物が目撃されている

「ライザ・デイスカス!!」

アス力達は、驚きの声を上げた。

「どうしたことだっ何でライザさんが・・・」

「知り合いなの？俺は直接会った事ないけれど、きっと白いコート

の奴らに殺されたに違いないね・・・」

「でも何でライザさん、エターナルにいる筈なのにロウグで殺されちゃったんだろう・・・」

「わかりません。とにかく、ロウグへ向かいましょう！！ネフェスは後回しです！！」

アス力は拳を、ぎゅっと握り締めた。昨日、短い時間ではあったが共に任務をこなした仲間。そんなライザに自分の面影を少し感じていたアス力は、ライザを殺されたことが許せなかった。

「許せねえ・・・」

アス力の瞳には、怒りがこもっていた。

「しかし、気になりますね・・・なぜライザさんは、殺されなくては、ならかったのでしょうか・・・」

「どうしたんだよルーク！！早くロウグへ行こう！！」

「はい、すみません」

目指すは、霧の町『ロウグ』。白いコートの手掛かりは、きっとそこにある。

一同は、手掛かりを求め、ロウグへ。

## 第十八話 その情報（後書き）

ライザの死を知ったアスカ達は、事件の真相を探る為に、霧の町『ロウグ』へ。ライザは一体何を知ったのだろうか。次話『手掛かり』

## 第十九話　手掛かり　（前書き）

この小説が連載してから一ヶ月ほど経ちました！！いつもご愛読ありがとうございます。まだまだ話は続くので、応援よろしく願います。



## 第十九話　手掛かり

「ここが・・・ライザさんが殺された町。白いコートの手掛かりはきつとここにある筈なんだ・・・」

アス力が拳を強く握り締めながら言った。

「まずは、周囲の人に聞き込みをしましょう。何事も情報収集は大事です」

「わかった。じゃあ、一時間ほど情報収集して、またここに集合だ。それでいいか？」

「異議なし」

「それでいいでしょう」

「よしっ、解散っ！！」

クレアの合図とともに一同は、情報収集を始めた。

やがて集合の時間になり、一同は、集まった情報の報告をしていた。「では、私から。『事件の当日大きな音がした』これくらいしか私は集めることが出来ませんでした」

ルークが申し訳なさそうに言った。

「んじゃあ俺ね。『呪文ではなく、魔術を使用した痕跡があった』そうだ。でもなんでそんな事がわかるんだ？」

アス力は首を傾げながら言った。

「魔術は、呪文に比べて魔力の密度が濃いですから、魔力が付近に残るんですよ」

サラツとルークが答えた。

「次は俺ね。俺が聞いた情報は『白いコートを着た人物が二人、この町をうろついていた』だよ。じゃあ次クレアちゃん」

ハロルドが少し急かすようにクレアに言った。

「えっと、私の聞いた話は『白いコートってお店のパンは、おいしいうつてのと、白いコート屋ってお店がある』くらいしかわからな

ったよ」

クレアは、「頑張った方でしょ」っと言わんばかりの表情を浮かべた。

「何かが違うよ・・・クレア」

一同は、そんな事を思った。しかし、ルークだけは、クレアの話に少し耳を向けていた。

「クレアの教えてもらったその二つのお店に行ってみましょう。何かわかるかもしれせん」

ルークは真剣な表情で言った。

「でもさ、パン屋なんか行ってどうするんだよ」

その表情が真剣だった為、アス力達はパン屋に行くことに反対をしなかった。

「・・・さあ、深い考えはありませんよ。ただ、何か関連性がありそうな気がただけです。他に行く当てもありませんし」

「まあそれもそうだよね」

ハロルドもルークの意見に賛成だった。

「じゃあ、パン屋さんに行こう!!」

クレア、テンション高っ!! そんな事を思いながら一同は、パン屋に向かった。

第十九話 手掛かり (後書き)

次話 『その店』

## 第二十話 その店々（前書き）

情報収集でクレアが聞いたパン屋に向かったアス力達・・・

## 第二十話 その店

一同はパン屋「白いコート」の前に立ち、絶句していた。

「・・・黒いな」

アスカがやつとのことと言った。

「・・・黒いですね」

「・・・どうみても黒だね」

「・・・真っ黒だね」

そのパン屋は、店の名前に反して見事なまでに真っ黒だった。何だかとてもなく怪しいオーラを出している。

店というよりは幽霊屋敷といったほうがしっくりきそうだ。

「とりあえず店に入ってみましょう」

ルークの言葉に、一同は店へと入っていった。

「いらっしやいませ・・・」

店に入った瞬間、か細いぼそぼそとした声が聞こえてきた。

カウンターのところに座っている男が発した言葉だ。恐らく彼が店主なのだろう。

肌はかなり不健康そうで青白く、しわくちゃだ。年齢は50代後半から60代前半といったところか。

「あの、少しお話をお聞きたいのですが」

ルークが言うと、その男はギョロリと目を動かした。

「何でしょう？」

「最近この町で、ホーリーナイトの男が殺害される事件がおきました。現場では白いコートの人物が目撃されているのですが、何か心当たりはありませんか？」

男は話を聞いて驚いたように眼を見開いた。

「き・・・貴様ら・・・」

「え、なに？」

クレアが聞き返す。

「貴様ら・・・出て行け！　今すぐ、今すぐだ！　出て行け、この蛆虫どもが！」

店主のいきなりの変貌ぶりに4人は何が何だか分からず、立ち尽くした。

「出てけ！　汚らしいガキどもめ！　そんな奴、ワシは知らん！　出てけ！」

店主は相当混乱しているらしい。

これ以上まともな会話はできないと思った4人は、店の外へと避難した。

「あのオジサン、絶対変だね」

店の外で、ハロルドが店を見ながら言った。

「何か知ってるに違いない」

「そうかもしれない。ただ・・・」

ルークはため息をつきながらパン屋を見た。

「しばらくまともな会話はできないでしょう。あの状態では」

「じゃあ、どうするの？」

「・・・とりあえずもうひとつの「白いコート屋」にも行ってみましょう。それからもう一度ここによってもう一度話を聞く。いつでもあの人が素直に話してくれるとは思えませんがね」

4人は同時にため息をついた。

「とりあえずもうひとつのほうにも行ってみようぜ。何か分かるかもしれないし」

アスカがいい、4人はもうひとつの「白いコート屋」へと歩いていった

第二十話 その店々（後書き）

次話『もう一つの店』

## 第二十一話 もう一つの店（前書き）

真つ黒な店を後にしたアス力達は、白いコート屋と言つ店へと向かつていた。



## 第二十一話　もう一つの店

「それにしても黒かったな・・・パン屋」

「はい。真っ黒でしたね・・・パン屋」

「全然おいしそうなパン屋さんじゃなかったよ・・・」

「俺よくわからないけど、ちょっとシヨックだったよ・・・」

一同は、店名と店の見た目のギャップの激しさに何故かシヨックを受けていた。

「あっここだよー!」

クレアはそう言うのと早歩きになった。

「・・・今度は普通だ。ここも真っ黒だったら俺立ち直れなかったよ。さっ中に入ろうぜ」

アス力はホッとした顔で店に入ろうと言った。

「そうですね。中へ入りましょう」

中へ入ったアス力達の目の前には、想像を越えた世界が広がっていた。

「いや、ここは、普通で安心したよ。・・・『黒いコート』しか売ってねええええ!!!」

アス力はその光景に己の甘さを知ったのだった。油断してはならないと言う事を。

「うわあやばい、俺なんか泣きそうだよ」

クレアは泣きそうなハロルドを、微笑みながら励ました。

「ははっ愉快ですね」

そんな会話を続けていると奥からこの店の従業員と思われる女性が出てきた。

「珍しいわ、ここにお客さんが来るなんて」

そりゃそうだろう・・・一同は心の中でつぶやいた。

「急で申し訳ありませんが、お尋ねしたことがあります。お時間よろしいですか？」

ルークがその女性に聞きたい事を尋ねた。

「そういう事件があったのは知ってるけど・・・あたしには心当たりないわね」

サロマと名乗ったその従業員の女性は少し困ったように言った。

「そうですか」

サロマの答えを聞き、ルークが残念そうに言った。

ここでも収獲なし。

4人は諦めて店を出ようとした。が、そのとき、サロマが不意に「あ！」と声を上げた。

「何か思い出したんですか？ サロマさん」

クレアが期待に満ちた目でサロマの方を振り返った。

「ちよつと噂で聞いたんだけどね、このこと同じ「白いコート」って名前のパン屋さんの主人が事件について何か知ってるみたいなのよ」

「ほ、本当ですか？」

「いや、ただの噂だからあてにされても困るけどね」

「でもさつきその店行ってみただけど、事件のこと話したらいきなり怒り出して話なんて聞けなかったぜ？」

アスカの言葉に、サロマはうーんと唸った。

「あの人、最近何かに怯えてるみたいなのよね」

「怯えてる？」

「ええ。前までは普通の人だったんだけど、最近はやたら挙動不審になっちゃって。店に閉じ籠って外に出ようとししないの」

4人は顔を見合わせた。

「どうする？ もう一度あのパン屋に行ってみる？」

「でもサロマさんの言葉が本当なら、簡単に私たちを信じてはくれないんじゃない？」

ハロルドにクレアが言葉を返す。

4人が同時に唸った。

と、そのとき、町中にどーんという巨大な音が響き渡った。

「な、なんだ!？」

「爆発音です!」

「どこからだ!？」

アスカは辺りを見回したが、町中に薄く掛かっている霧のカーテンにより、場所が特定できない。

「あの方向・・・さっきのパン屋さんじゃ!？」

クレアの言葉にアスカは、はっとした。

「行こう!」

ハロルドの言葉をきっかけに、4人は一斉にパン屋へと駆け出していった。

「・・・・・・・・」

駆け出していった4人の背中を、サロマは無言で店の窓から見つめていた。

第二十一話、もう一つの店（後書き）

次話『焼け跡』

## 第二十二話　焼く跡　（前書き）

サロマの店を出ると大きな爆発音が。音のする方へアス力達は、駆けて行く。

## 第二十二話　焼け跡

パン屋の前に到着した一同が見たその光景は悲惨なものだった。

「うわゝ真つ黒を極めちゃったね」

ハロルドが吐き捨てるように言った。

「この状況ではあの方は生きてはいないでしょう」

ルークの冷静な判断には、皆納得した。

「一体何故ここが爆発したんだ？」

「わからないなあ。そう言えば、ここのお店の人何かに怯えてたつて聞いたよね」

「じゃあ、何かを知っちゃってることかなあ」

「おそらくですが、この店の店長は『白いコート』の組織となんらかの関係があり、何か重要な情報を耳にしてみました。そして口止め、その関係を絶つ為に殺した。まとめると、まあそんなところでしょう」

「ひどい。何も殺すことないのに・・・」

「いえ、ひどいとは限りません。組織の情報や秘密を守るのには、もつと効率のいいやり方です。殺すと言う事は、余程重大な何かが起ころうとしているか世間に知られれば計画が失敗に終わる等に違いありません」

「許せねえ・・・」

「必ず正体を暴いてやるんだから!!」

「もちろんです」

「絶対に正体を暴こう」

アスカ達は声に出して誓った。

「ルーク准将!! ルーク准将!! 伝令であります」

ホーリーナイツの隊員が駆けつけて来た。

「どうかしましたか？」

「ホーリーナイツ本部に直ちに帰還せよとのことですよ」

「！！」

一同はその言葉に驚いた

「なんでだよ！！まだ俺たち任務こなしてないんだぞ！！」

「しかし、伝令ですので私に言われても困ります」

「アスカ、一旦本部に戻りましょう。もしかしたら『白いコート』  
について何かわかったのかもしれませんが。それにあなたには、正式  
な入隊手続きをしてもらいます。いつまでも仮入隊ではいられませ  
んから」

「ではルーク准将、僕はこれで失礼します」

「ご苦勞様です」

ルークはにこつと笑い隊員に礼を言った。

「本部つてどこにあるんですかぁ？」

クレアが尋ねた。

「本部は、光の都市『サンライタウン』にあり、ここから北東に  
進んだ所にあります。ですがここからはかなり距離があります。サ  
ンライタウンまで、いくつか町や村がありますから、ゆっくり行  
きましょう」

ルークは急ぐ気はないらしい。伝令では、直ちにとわれたのだが。  
「よっしゃぁサンライタウンに出発だぁ！！！！」

こうしてアスカ達はサンライタウンに向かうのであった。

第二十二話、焼け跡（後書き）

次話『料理の町』



## 第二十三話 料理の町 (前書き)

伝令を聞き、ホーリーナイツ本部があるサンライトタウンにアスカ達は、向かうことになった。

## 第二十三話　料理の町

あれからアスカたちはロウグを出てひたすら北東へと歩いた。平坦な道が続くだけ。まわりの景色はちつともかわらない。正直うんざりしてきた。

アスカはちらりと3人の方を見る。

アスカだけでなく、クレアやハロルドの顔もかなり気だるそうだ。ただルークだけが涼しい顔で歩き続けていた。

「あ、町だ！」

隣を歩いていたクレアが嬉しそうな声を上げた。

前を見ると、確かに小さく家が集まっているのが見えた。

「何とか日没までに到着できそうですね。恐らくあそこは料理の町『ディッシュ』。食通の間では有名な町ですね」

「料理の町・・・ということは食いもんがおいしいってことか？」

「そういうことです。今日の夕食は期待できそうですよ」

「・・・よしっ！」

ルークの言葉に、アスカはひそかにガッツポーズを取った。

町に入り、まずは店を探そうということになり、4人は町の中を彷徨った。

が、さすが料理の町というだけあって店の数が半端じゃない。

レストラン、喫茶店、ラーメン屋、料亭。

ありとあらゆる種類の店が所狭しと並んでいる。

「私ラーメンがいい！」

「僕はあつさりしたものがいいんですが」

「俺はカレーだな」

「俺ステーキが食いたい」

・・・全員の意見はバラバラだった。

どうするか悩んでいると誰かが声を掛けてきた。

「パスタなんか如何ですか？さっぱりしたのからこってりしている  
のまで沢山ありますよ」

「お姉さん誰？」

ハロルドが尋ねるととても素晴らしい笑顔を浮かべて答えた。

「リザという者です。近くでパスタを扱ったお店を経営しております」

「ねっパスタにしようよ！！！」

「そうだなゝたまにはパスタもいいかな」

こうしてリザのお店に行くことになった。

第二十三話 料理の町（後書き）

次話『 Pasta 』

## 第二十四話　パスタ（前書き）

料理の町ディッシュに訪れたアスカ達は、リザの経営する店へ行くことに。

## 第二十四話　パスタ

「ふーうまかったあーなんて言うか、懐かしい味だった」

「私も久しぶりのパスタだったので大満足ですよ」

リザの作ったパスタは、どこか懐かしい味がして、おいしい。皆、大絶賛だった。

「おいしかった？よかったわ、喜んでもらえて。そうだ、泊まる所まだ決まっていないわね？よかったら家に泊まっていくな？」

リザは感じがよく、優しくった。一同はリザの言葉に甘え1泊していくことにした。

リザのお店は、パスタ中心の料亭と宿泊施設が一つになった宿であった為、風呂も大きかった。

「おおー風呂でつけー！！」

「俺こんなでつかい風呂初めてー！！」

アスカとハロルドは、はしゃぎ回っていた。

「走ると転びますよー」

ルークは、はしゃぎはしなかったが久しぶりの広々とした風呂に少し喜びを感じていた。

「こここのところ、支部の小さなお風呂借りていましたからねえ。気持ちわかりますが、もう少し大人しくしててください。でないと本当に転んでしまいますよ」

ルークが言うと、案の定ハロルドは派手に転んだ。それを見て笑っていたアスカも続くように転んだ。

「はあ・・・だから大人しくしてくださいと云ったでしょう。ゆっくりお湯に浸かって体の疲れをちゃんととておい・・・」

ルークが喋っているとアスカ達は、それをまったく聞かずに湯に思いつ切り飛び込んだ。

ザッパアアアン！！二人が飛び込んだ勢いで水しぶきがルークに勢い良くかかった。それから暫くルークが口を開くことはなかった。

「ふふっアス力達はしゃいでるなあ。まっこんなに広いんだもん当然かな？・・・やっぱり、女の子一人だとかこういう時ちょっと寂しいなあ」

クレアがお湯に浸かりながらつぶやくと、リザが入ってきた。

「うわあっ！！」

リザはさっきまで髪を結んでいたのだが今は髪を下ろしていた。それがとても魅力的だった。

「そんなに驚かなくてもいいじゃない。もしかしてさっきの独り言聞かれたくなかった？」

「うっ・・・さっきの聞いてたんですかあ？」

リザはクスツと笑うとまた話を始めた。

「あなた可愛いわね。大人っぽいし、モテそうだわ」

「そんなことないです。リザさんだつてすごく美人じゃないですか」

「ふふっありがとう。さっきの独り言からすると、もしかしてあなた彼のが好きなの？えっと確かアス力君だったかな？」

「ちっ違いますよっ」

クレアは、顔を真っ赤にしながら言った。それは、あまりにもわかりやすい反応だった。

「わかりやすいわね、本当に」

「リザさんのいじわる」

クレアはちよつと泣きそうだった。

「そう言えば、リザさん、結婚してないんですか？」

「してるわ。でも主人先日亡くなったの。正確には殺されたみたいなんだけど」

その言葉にふとあることがクレアの頭の中に浮かんた。

「私の夫は、ホーリーナイトの隊員でライザって言うの。結構名が知られてたのよ。でも死んでしまったわ」

クレアの想像通りだった。クレアはリザに申し訳なくなった。

「すみません。なんか悪いこと聞いちゃって」

「いいのよ。あなたは悪くないわ。それより、今夜町の中心あたりでお祭りがあるからアス力君と行ってきたら？」

「本当ですか？でもアス力来てくれるかな？」

「大丈夫きつと来てくれるって」

「はい！！」

クレアはアス力を誘おうと風呂から上がり、アス力達の部屋に向かった。



第二十四話　パスタ（後書き）

次話　『二人きりの祭り』

## 第二十五話 二人きりの祭り (前書き)

リザに言われ、クレアはアスカを祭りに誘い、アスカと二人で町へ向かっていった。

## 第二十五話　二人きりの祭り

クレアはリザの助言に従い、アス力を祭りに誘った。

元々祭り好きだったアス力は二つ返事で承諾し、2人で祭りへ出かけることになったのだ。

2人きりで祭りを楽しみたかったクレアだが、アス力を連れて行くとき、ハロルドに見つかってしまい、もう少しでついてこられるところだった。

もちろんハロルドのことは仲間だと思っているが、2人きりの時間を邪魔されたくはなかった。

結果としては運良くそこに通りがかったリザがハロルドに無言の圧力をかけてくれたおかげで、こうして2人きりで出かけることができたのだが。

「あ、ねえねえ、金魚すくいだよ金魚すくい！　ね、やる！」

「やるったって、金魚取ったところで俺たちじゃ飼えないぞ」

「リザさんに飼ってもらえばいいよっ！」

「お前が勝手に決めるなよ・・・」

アス力はそういつつもお金を出してくれた。

それからしばらくの間、2人で金魚すくいに興じたが、結局1匹も取ることはできなかった。

「くそ、あの金魚たちめ！」

「金魚に怒ったってしょうがないよ」

始めはクレアがやるうと言い出した金魚すくいだったが、途中からはアス力のほうが熱くなっていた。

「次はあいつだっ！！」

「もうやめておけば？」

「捕るまで帰らん！！」

「えっ！！！」

「なっ！！このっ！！だあもう、逃げんな金魚め！！」

どうやら1匹も捕ることができないのが悔しいようだ。断固たる決意で金魚をすくうアス力を見てクレアは、優しく微笑んだ。

と、そのときだった。

「・・・あれ？」

クレアは思わず声を上げた。

「あ？　どうかしたか？」

「・・・あ、いや、なんでもないよ」

「ふうん？」

アス力は不思議そうに首を傾げたが、それ以上深くは追求してこなかった。そしてまた金魚をすくい始める。いつになれば、終える事のできるのかわからないこの小さな戦いを。

クレアは見たのだ。溢れる人並みの向こうに、ロウグで「白いコート屋」をやっていたサロマが歩いていたのを。

「・・・まさかね」

クレアは見間違いだと思い、サロマのことは忘れた。

ぱーん。

そこらじゅうに爆発音が響いた。

が、それはロウグで聞いたような激しい音ではなく、どこか懐かしいような音だった。

「あ、花火」

クレアが空を見上げて言った。

夜空には美しい火の花がいつぱいに咲いていた。

「おー、打ち上げ花火なんて見るの久しぶりだ」

アス力が少し嬉しそうに言う。

次々に打ち上げられる花火たちは、一瞬美しく光っては、消えていった。

「綺麗だね」

「ああ、すっげー綺麗だ」

クレアはそっとアス力の方を横目で見た。

目を細めて空を見ているアスカの横顔が、次々に色を変える花火に  
照らされている。  
クレアは幸せそうに、そっと微笑んだ。

第二十五話 二人きりの祭り 〔後書き〕

次話 〔消えた三人〕

## 第二十六話　消えた三人　（前書き）

リザに言われ、お祭りに行ってきた二人。二人が帰ってくるとそこには誰もいなかった。

## 第二十六話　消えた三人

祭りを満喫した2人はリザの家へと帰ってきた。二人の片手には、金魚の入った小さな袋があった。どうやら金魚を捕る事が出来たようだ。

「ただいまー」

アスカがそう言ったが、返事はない。

2人は顔を見合わせた。

「ただいまー」

再び言ってみたが、やはり返事はない。

「どうしたんだろうな？」

何かあったのだろうか。ただちょっと出かけているだけだろうか。

2人が立つ玄関には、本来あるべきルーク、ハロルド、リザの3人の靴が忽然と消えていた。普通は、靴は履いたまま中に入るのだが、リザは靴を脱ぐように言っていた。つまり、ここに靴がないのは、出掛けている証拠なのだ。

三人を捜すか、ここで待っているか二人は暫く話し合った。その結果少しの間待つてみる事になった。

「たかつどこ行っただろうな」もしかして俺達を捜しに行っただんじゃないか？」

「とにかく、帰ってくるのを待つてよう。もしかしたら皆で出かけたのかもしれないし」

居間で、話し合っていると二階から誰かが階段を下りて来る。

「誰かいるみたいだぞ。ちょっと様子を見に行つて来る」

「気を付けてねえアスカ」

心配そうな顔で見つめるクレアを、背に、アスカは階段に向かう。

「誰かいるのか？」

「ふわあゝ寝ちゃったよあゝ。あつアスカ君お帰り　クレアちゃ



んとのデートはどうだった？俺だけお留守番つてのは寂しかったんだぞ！！」

「なんだ、ハロルドか。泥棒かと思ったぞ。それよりルークとリザさんは？」

「一人寂しくお留守番していた人を泥棒扱いするとは、ひどい人だなあ。あの二人ならデート中だよ」

「へえ、ルークがリザさんとねえ。ほっほっほ怪しいですな」

アスカが不気味な笑みで笑っているとクレアが話し掛けてきた。

「きつと、そんなんじゃないよ。あのね、リザさんは結婚してるの。でも旦那さんは先日亡くなっちゃたんだ。その旦那さんの名前は『ライザ・ディスカス』。あのライザさんなんだよ」

クレアは小さな声で言った。暫く三人の間に沈黙が訪れた。暫く黙り込んでいるとアスカがあることに気が付いた。

「ん？待てよ。ハロルドはここににいるのに玄関にハロルドの靴がなかった。なんかおかしくないか？」

そう言いながら、アスカはハロルドの足元を見た。なんとハロルドは、靴を履いたまま、家を歩き回っていたのだ。寝ぼけていたせいだろう、普段の生活習慣が自然に出てしまったのだ。「ハロルドっ早く靴脱いで来い！！リザさんに怒られるぞ！！」

「うわっ！！やっぱあゝさっき外に出た時脱ぐの忘れちゃったんだあ」

アスカ達がアタフタしていたその時、ガチャツとドアが開く音がした。どうやらルーク達が帰ってきたようだ。

「あれ？もう帰ってきてたんですか？もっとゆっくりしててもよかったんですよ」

「そうよ、そうよ、もっとゆっくりしてればあゝいいのよおお」ルーク達はバーでお酒を飲んでいたらしく、アルコールの匂いがした。ルークの意識は、はつきりとしていたが、リザは完全に酔いつぶれていた。ルークは、リザを寝室まで運び、居間に戻ってきた。「一応皆さんに話しておきたいことがあるのですが・・・」

「リザさんの旦那さんはライザさんです。だろ？」

アスカがそう言くと、ルークは一瞬驚いた。

「知ってたんですか」

「ああさっきクレアから聞いたんだ。クレアはお風呂でその話をリザさんから聞いたんだと」

「ねえ、今日はもう遅いし、明日ここを出るんでしょ？もう寝ようよ」

ハロルドが言っていると、リザに借りた部屋に行き、眠りについた。

第二十六話　消えた三人　（後書き）

次話　『奇怪な村』

## 第二十七話　奇怪な村

翌朝、おいしそうないい匂いが漂ってきた。それに誘われるかのよう  
にアス力は目覚めた。出発の準備を済ませてから、階段を下りて  
居間に向かうとすでにルークとクレアがいた。ルークはいつもどお  
りコーヒーを飲みながら本を、読んでいた。クレアは朝にもかかわ  
らず、大きな声ではよう、アス力と言ってきた。アス力もそれ  
に小声で答える。

「まだハロルドは、起きてきてないのか？」

「昨日一番最初に寝始めたのにね。まるで子供みたいだね」

「そう言えば、ハロルドって歳いくつなんだ？」

「俺は１６歳だよ。ふあ、眠い眠い」

たつた今起きたハロルドが欠伸をしながら、答えた。

「えっそんな歳だったのか？俺はてつきり同い年かと思ってたぞ」

「えっ！アス力それはおかしいでしょ？どう見ても、もっと子供っ  
ぽいでしょ！１６歳より下に見えるくらいだよ」

ハロルドは実年齢に比べ子供っぽい顔つきだった。

「よく言われる」

ハロルドが眠たそうに言った。それを見ていたルークとリザは、お  
互い目を合わせてからクスツと笑った。なんともいい雰囲気だ。

「さっ、冷めないうちに朝ご飯食べましょ！！今日も抜群においし  
いはずよ」

「よしっご飯食べようっ！！！なんかリザさんは、お母さんみたい  
だなあ。じゃあ、いただきま〜す！！」

ハロルドはそう言って、朝ご飯を食べ始めた。それをクレアは寂し  
げに眺めた。

ハロルドの両親は白いコートの人達に殺されたんだっけ・・・  
そんなことを思いながらクレアも朝食を食べ始めた。

「さて、朝食も食べ終わりましたし、そろそろ出発しますか」

一同は荷物を持ち、リザの店を出た。

「お世話になりました。俺、任務とか旅行で近くに来たら顔見せに来ます」

「リザさん、お世話になりました。今度お料理教えてください！」

「リザさんのこと『お母さん』と呼ばせてください！！ていうか、もう息子にしてください！！」

「お世話になりました。また飲みにも行きましょう」

一同はリザに挨拶、いや、一通り言いたい事を済ませた。

「また、来てね！！おいしい料理作って待ってるから」

手を振りながら一同は、町の出口に向かった。するとリザが大きな声で叫んだ。

「ルーク！！・・・あつあの・・・また会えるよね？」

もちろんですよ！！そう言つてルークはまた前に進みだす。昨夜何があつたんだ！！そんなことを一同は思った。

「ルーク！！何があつたんだあ！！」

「何もありませんよ。ただ昨日彼女のグチやら苦勞の話を聞きながらお酒を飲んだだけです」

「本当かよ？」

ルークは意外に女の子にモテそうだなあゝ心の中でクレアがつぶやいた。

こうして一同は、料理の町『ディッシュ』を後にするのだった。

料理の町『ディッシュ』を後にしたあと、4人はいくつかの町や村、集落などを過ぎた。

そしてとうとう、目的地『サンライトタウン』が見える場所にまで来た。

「ね、あのちよつと遠くに見えるのつて・・・」

クレアが指差した先には、まだ遠いがうつすらと光を振りまいていゝる巨大なビル群があつた。

「はい。あれが光の都市『サンライトタウン』です」

ルークがビル郡の方を見ながら言った。

「ここまで来れば到着までそう時間は掛かりません。今日はこの近くにある村に泊まりましょう」

「やっと到着かー。ところでその村ってどこにあるんだ？」

アスカが聞く。

「あと2、3 kmといったところでしょう。その村は『レジェンド』というのですが……。奇怪な村でしょね」

「奇怪？」

「ええ。何度か泊まったことがあります、町全体の空気が重苦しいんですよ。村人たちは何かに怯えているようにも見えました」

「怯えてる、だって？」

ハロルドが眉をひそめる。

「それにあの村の別名を知っていますか？」

妖怪の村、です

よ」

第二十七話、奇怪な村（後書き）

次話、『レジエンド』

## 第二十八話　レジェンド

「妖怪！？」

3人の声がそろった。

「あわわわわわわ　私は、そんな村に行きたくないよ　オバケとか妖怪とか私はダメなのよお」

「大丈夫だろ　そんなのいねえよ！！」

アスカがその場に座り込んでしまったクレアの腕を掴み、クレアを立てせた。

「アスカの言うとおりですね。まあ、大丈夫でしょう。私が泊まったときに、妖怪なんて現れませんでしたからね」  
ルークは微笑した。

「確かに空気がどんよりしてるよな。心なしか」  
アスカが呟いた。

村全体に活気というものがないように思える。

「お、おい、あれを見る」

不意に4人の前に現れた村人の男が驚いた顔で4人を指差していた。

「お、おお！　あ、あれは」

「も、もしや！」

「救世主様だ！」

男の声に集まってきた村人たちは、みな一様に4人を見て驚いた顔をしていた。

「何なんだ、一体？」

アスカが困惑気味に言った。

と、そのとき、村の奥のほうから1人の老人がゆっくりと歩いてきた。

「紅の少年と蒼の青年、銀髪の少女と童顔の少年。4人が訪れたと



き、村は救われる・・・」

老人は静かな声で言った。

「この村に古くから伝わる言い伝えじゃよ。わしは村長のゴドというものじゃ」

ゴドは落着いた物腰の老人であつた。

「・・・あの、救われるというのは？」

「この村は妖怪に取り憑かれておるのじゃ。もしも君たちが救世主であるのなら、この村を救つてはくれないか？」

ゴドは4人はしっかりと見据えながら言った。

「どうする？一応俺達急いでるんじゃないのか？」

確かにアス力達は早急に帰還するよう言われていた。

「まあどうせ、ここに泊まるんだからいいんじゃない？」

「・・・まあいいでしょう。ゴドさん助けて欲しいとは、具体的にどうして欲しいのですか？」

「・・・いいのか・・・？」

アス力は本当にゴド達を助けるべきか少し悩んだ。もつとも権力のある総司令官からの「直ちに帰還せよ」との命令なのだから、こんな所で道草を食っている時間は無いと考えるのが普通だろう。目と鼻の先に目的地は見えているのだから、一步でも先に進みたいと言うのが一般的な思想だ。辺りは明るい訳でもないが、日が落ちた訳でもない。次の村か町までは、どう考えても行けそうだというのに何より、こんな不気味な村にすることがアス力にとっては、一番イヤで仕方がなつた。それが本音だ。

しかし、アス力は頭の中で思ったこと、捨てることにした。

「実は、一週間程前に起こった事なんだが、山へ行つた若い男たちが帰らないのだ」

「それなら自分たちで探しに行けばいいんじゃないか？」

「まあ最後まで話を聞いてください、アス力」

「おっおう・・・」

できるだけここにいたくないアス力をルークが黙らせると、ゴドが

話を続けた。

「無論、探しに行ったのじゃ。怪我でもしたのだろうと思い、村の若い男達に救助行かせたのだが結局誰も見つからず、救助に向かった男達も帰ってはこなかった」

第二十八話、レジェンド、（後書き）

次話、『救助』

## 第二十九話　救助

「要するに、山へ行つて私たちが事件の謎を暴けばいいのね？」

かなり危険な頼みにもかかわらず、クレアはやる気満々だった。

「しょうがねえなあゝじゃあさくつと終わらせて、サンライトタウンに行こうぜ」

「おおゝ引き受けてくださりますか！　ありがとうございます！」  
はあゝつとアスカが溜め息を吐くと、クレアとハロルドが走つて山の入り口まで行つてしまった。

「何やつてんのよゝ早く行こうよゝ！！」

「なんでそんなに急いんだよ！！クレアもハロルドも！！」

「よくわかんないけど、クレアちゃんが急いでるから早く行こう  
！！」

どうやらハロルドは、クレアが走り出したのにくっついて行つただけの様だ。

「さて、あいつら行つちまつたし、俺達も行こうか」

「そうですね」

二人が歩き出そうとした時、ゴドが二人を呼び止めた。

「お二方！！一つ忠告がある、この山には獣がおるのじゃ。普段は、獣除けの薬を身にまとうのだが生憎薬をきらしていて・・・だから気をつけて行くのじゃ」

「そういうことは、もつと早く言えつての！！」

「まあまあ、私達の旅は元々危険なんですから」

ルークに言われ、ムスツとした顔でアスカは歩き出した。  
こうして山の入り口へアスカ達は、向かうことになった。

山には鬱蒼と木が茂っていて、まだ昼間なのに薄暗かった。  
4人はそんな中を当てもなく歩き続ける。

「どこにいいのかなあ、村の人たち」

あたりをきよるきよると見回しながらクレアが呟いた。

「見当もつかねえよ。こんなとき、ライザさんがいればなー」

アスカはそう言ってから黙り込んだ。

ライザはもう、この世にいないのだ。

この沈黙を断ち切るかのように、ルークが口を開いた。

「油断だけはしないでくださいね。獣に襲われてもすぐに応戦できるように」

ルークがちらりと3人を横目で見ながら言った。

「分かってるよお。・・・ん？」

ハロルドが前を見て声を漏らした。

「あれって、洞穴じゃないかな？」

ハロルドの指差す先には、切り立った崖があり、岩に大きな穴が開いていた。

「巨大な洞穴ですね・・・。中を調べてみましょう」

「うつわあゝなんかワクワクするねっアスカッ!!」

「バカッ!!人の命が、かかっているかもしれないんだぞ!!そんな事言ってる場合かっての」

アスカが怒った為、クレアがしょんぼりしてしまい、辺りが静かになった。静まり返った山は、不気味さを増した。

そして、4人は小走りで洞穴のほうに向かった。

第二十九話、救助、（後書き）

次話、『拳』

### 第三十話　拳

洞穴の中は真っ暗でとても明かりなしでは、中には入れなさそうな場所だった。

「おい、誰がいるかー?」

アスカが声を張り上げた。

すると穴の奥からも「おい」という言葉が返ってきた。

「中に誰がいるんだ!!」

クレアがぱつと顔を輝かせる。

「行ってみましょう、中は真っ暗で危険です。なるべく固まって行動しましょう」

4人は頷きあい、中に入ろうとした。が、そのとき。

アスカたちは背中にぞくつとするものを感じた。何かが重くのしかかるような、そんな感覚だった。

4人が同時に後ろをパツと振り返ると、そこには身の丈4メートルはあろうかという巨大な獣が立っていた。

「うわっ!!」

「でかつ!!」

「こわっ!!」

アスカ達の反応は、期待通りだった。

アスカとハロルドは、装備していた武器を構え、クレアは数歩後退し、杖を構え体勢を整えた。が、しかし、ルークは武器も構えずに黙り込んでいた。

「何やってんだルーク!!危険だぞ!!」

そう言うのアスカは、いつでも魔物の動きに対応できるよう、体制を取った。

「・・・待ってください。彼は敵ではありません」

ルークの言った言葉の意味を理解するのにアスカ達は少し時間がかかった。今にも太くて大きなその拳が、アスカ達に落ちてきそうな

のだから当然だ。

「どういう意味なのルーク？」

クレアが尋ねると、ルークが口を開いた。

「彼はこの山に住む、伝説の獣人の一人です。彼の持つ拳の硬さ、強さは魔物の中で世界最強クラスと言われている程です。彼の名は、その伝説級の拳に因んで『フィスト』と呼ばれています」

「で、それが攻撃してこないってことと、どう繋がるんだ？」

「彼は、人間にその力を貸してくれる、『存在』なんです。この世には、旋律師、ああ旋律師と言うのは、呪文を主な戦闘方法として戦う人のことです。呪文を発動する際、詠唱を詠うと言う旋律を奏でますから旋律師と言うんです。それから魔術を主に使う魔術師、そして彼のような魔物を召喚し、戦わせる『召喚師』がいます。つまり、魔物は魔物でも彼は味方なんです」

「そういうことだ・・・」

低くて、背筋にゾツとくるような声が聞こえた。

「試したんですか？『村』の人々が私達を」

「？」

「そのとおりだ。この村に来た時に村の者がいなくなつたと言われたと思うがそれは嘘だ」

この展開に、アスカやクレアは、もちろんハロルドも付いていけなかった。



### 第三十一話　召喚師

「・・・は？　試したって一体どういうことなんだ？」

アスカが混乱したように言う。

「それに村の人たちが嘘をついてたって・・・？」

「ええ、その通りです」

ルークが冷静に言う。

「文字通り、私たちはこの村の人々に試されていたんですよ。・・・あなたが召喚したのは、あの長老の方ですか？」

ルークはファリストを見上げながら言った。

「その通りだ。あいつは熟成された召喚師なのだ。この村で私を召喚できるのも、奴ぐらいのものだな」

「だー！　ちよつと待った！」

2人で勝手に話を進めていくルークとファリストに、ハロルドが待ったをかけた。

「一体どういうことなのか、きちんと説明してよねえ！」

ハロルドの言葉に、アスカとクレアもうんうんと首を縦に振る。

ルークが説明をしようと口を開きかけたそのとき、洞穴の奥から人の声が聞こえてきた。

「そのことについては、わしが話そう」

ゆっくりとした歩調で歩いてくる人物。

この村の村長にしてファリストを召喚した召喚師　　ゴドだった。

「長老、どういうことなのか説明してもらえますか？」

ルークが長老に問いかけると、長老は、その答えをすぐにかえした。  
「実はな、最近になってこの村にある『太陽光（ライト　オブ　ザ　サン）』と呼ばれる伝説の杖、つまりこのわしの持っている杖を奪おうとする輩が後を絶たないのじゃ」

「その杖ってなんか凄いのか？　まあ確かにデザイン的にも凄いところ

ろはありそうだけど・・・」

アス力が杖を見ながら言う。ゴドは話を続けた。

「この杖はな、光属性の魔物を召喚しようとする術者に、力を貸してくれる不思議な杖なのじゃ。きつとこの杖には、大量の光の魔力が込められておるんじゃ。召喚術だけではなく、光の魔法や呪文にもその効果を与えてくれるだろう。この杖は、魔術、呪文、召喚術を扱う者にとって最高の杖なのじゃ、ただし、光属性の術にしか効果を与えないのじゃがな」

ゴドが説明を終えると、ルークがそれをまとめるかのように言った。「つまり、私たちがその杖を、奪いに来た者ではないか試したと言うことですね？」

「そのとおりじゃ。すまなかつたな、しかしおぬし等は、見事試験を突破した。村の者全員で、もてなすぞ」

ゴドは、そう言って村へ帰っていった。

第三十一話、召喚師（後書き）

次話『真の名』

### 第三十二話　真の名

「なあ、どういふ基準で俺たちは試験に合格したんだ？」

「そうそう、俺も気になつてたんだよねえ」

アスカとハロルドがそう言うのとクレアが口を開いた。

「たぶん、フィストさんが現れた時、私たちに殺意があつたか、なかったか、とかそういうのだと思うよ」

「まあ、そんなところでしようね。少なくとも今まで奪いに來た人達には殺意があつたんでしよう」

「あの状況でそんなこと見極められるんだあ、凄いなここの村の人達は」

「もしかしたら、あの杖を守る為に特化した能力なのかもしれないね」

「てことは、ここは優しい人しか集まらない不思議な町になるんだね――」

クレアの考え方に、一同は小さな平和を感じた。アスカはもちろん皆、ホーリーナイトとイビルナイトで対立している今、この小さな平和がもつと大きなものになることを願った。

その後一同は、少しその場で休憩してから村へと向かった。

「よくぞ戻られた――！今夜はこの村でゆっくりしてってください」長老が帰つてきたアスカ達を歓迎し、暫く話し込んだ後、村人全員に聞こえるように大きな声を出すと、村人が家から飛び出し、村にはお祭りのような活気があふれた。久々の宴だった。その為、先程とは比べ物にならないほどの活気が村にあふれていた。

「久々の客人だあ、朝まで楽しむぜ――」

「よっしゃあ――！まず、俺はあのお嬢ちゃんを口説いて……」

「バカッ――！あの子の隣にいる紅い髪の毛の男の子、どう見ても彼氏だろう？お前じゃあ敵うわけがないだろ」

「やってみなきゃわからない・・・と言いたい所だが、彼には勝てる気がしないな。かなりいい男なんじゃないか？」

アス力はモテモテと言う程ではなかったが、わりと顔のいい男だった。しかし、性格が大雑把な為、クレア以外の女の子に、好意を持たれる事はほとんどなかった、いや、無に等しかった。

「よっしゃあゝハロルド！！美味そうなもん食いまくるぞー！！！」

「わゝい、美味しいもののお祭りだねえ！！」

祭り好きのアス力は、興奮し、ハロルドはアス力のマネをするかのように興奮した。

「はあゝアス力もハロルドもはしやぎ過ぎないでね」

一方、アス力達が村ではしゃいでいる頃、ルークは、長老と話をしていた。

「これは、推測なんです、杖を狙ってきた輩というのは、白いコートを着ていた者ではないですか？」

「いや、多分違うと思うのじゃが、もしかすると、そのような輩もいたかもしれぬ」

「・・・そうですか。それからこの杖は、光属性と言っていました、やはり相反する存在があると推測できる、その事から、闇属性の杖があると考えられます。闇属性の魔術や呪文は、とてつもなく強く、恐ろしく危険なものです。つまり、術者の能力をサポートする光の杖が存在するならば、闇の杖は闇の魔術や呪文のリスクを軽くしたり、その効果を倍増させることの出来る可能性があり、その存在は脅威です。こちらの杖が狙われていないとすれば、白いコートの奴らが狙うのは、そちらの闇の杖である可能性が高いでしょう。そこで頼みたいのは、その闇の杖についての情報です。お願いできますか？」

「いやゝこれは恐れ入りました。この杖の存在だけでここまで、たどり着けるとは・・・確かに闇の杖は存在するのじゃが、そのあまりの強さに扱えるものおらず、杖の力が暴走するだけ。それを危険に感じた、ある一部の杖関係者がその場所や詳細を極秘で隠した

のじゃ。私が知っているのはこれぐらい。能力等はあなたの推測どおりじゃ」

「・・・そうですか。貴重な話をありがとうございました」

ルークの顔は、少し満足げな表情を浮かべ、またいつもの冷静な顔つきへと戻った。そしてまた口を開いた。

「では最後にもう一つ、なぜ、ここは妖怪の村と呼ばれているのですか？」

「はっはっは、それは、杖の場所を誤魔化そうとしているだけですぞ。この村の本当の名は『精霊の村レジエンド』」

第三十二話、真の名（後書き）

次話『サンライトタウン』

### 第三十三話　サンライトタウン

翌朝、『精霊の村レジェンド』の村民たちからの盛大な見送りを受けて、アスカたちは村を発った。

「いい人たちだったねー」

ハロルドが言った。

「フィストさんがいきなり出てきたときはどうなるかと思ったけど」

クレアが苦笑しながらそう返す。

「それにしても・・・」

ルークがやや気の重たそうな声で言った。

「本当に受け取ってよかったんでしょかね、こんな貴重なものを」

そういうルークの手には『太陽光』が握られていた。

村長のゴドが、ぜひ持って行ってほしいといったのだ。

「近頃はこの杖を奪おうとする輩が増えて困っておるんじや。わしが生きているうちにはいいものの、もしものがあつたとき、この杖を守りきれるか不安なんじや。この杖を守る意味でもぜひ、持つて行ってほしいんじや」

ゴドの言葉に、ルークは反射的に受け取ってしまったのだ。

「いーんじゃねえの？ あつて困るもんじやないだろ？」

「それはそうですが・・・」

ルークに背中には「責任」の二文字が重くのしかかっているらしかった。

「ね、あたし思うんだけど、もしかしたらゴドさんたち、もうひとつの意味であたしたちを「試し」てたんじやないかな？」

「もうひとつの意味？」

「うん。その杖を託すのにふさわしいかどうか」

クレア以外の3人は「あ」と声を上げた。



「だから深く考えなくてもいいんじゃない？　もしそうだったら、一応あたしたち、合格ってことだもん」

「なるほど、そうですね」

ルークはようやく少し緊張をほぐしたようだった。

「・・・」

「どうしたの、ルーク？」

「いえ、なんでもありません。ただ・・・」

「ただ？」

「クレアにしては、珍しくいいこと言っただけです」  
「ちよつと、それどういう意味よ！！」

「まあ・・・そのまんま、ですかね？　ははははっ」

ムスツとしているクレアを、あざけるような声でルークは笑った。  
それがとても嫌味な感じだった。

「まあそんなことは、おいておいて。クレア、この杖はあなたが持つていてください」

「えっ、どうして？　それはルークが持つていた方がいいんじゃないの？」

「いえ、私よりあなたが持つていた方がこの先のことを考えると都合がいいんですよ。あなたはまだ魔力の量が少ないですし、光の呪文を扱うことを前提に修行しましたしね」

「なんか不安だなあ、この杖私に守れるかどうかかわからないよ・・・  
もしかして、私に責任を押し付ける為に渡したなあルーク！！」

「あはは、バレましたか。まあさっき言ったことも嘘ではありませんよ。私が持つよりあなたが持つた方がいいことは確かですから」

「じゃあお言葉に甘えて使わせて頂きます」

「・・・さて、ようやく到着しましたよ」

ルークが感慨深げに言う。

現在時刻午前11時25分。ようやくサンライトタウンに到着したのだ。

「ここが・・・ホーリーナイトの本部がある都市・・・」

目前に見えるその街並みを見ながら、アスカが呟く。

「さあ、行きましょう。　　ホーリーナイトの、本部へ！」

ルークの言葉を合図に、4人は歩き出した。

第三十三話、サンライツタウン、（後書き）

次話、『ホーリーナイツ本部』

### 第三十四話　ホーリーナイツ本部

遠くから見たこの町は、ビルばかりに見えるが実際に町に入ってみるとなんと、和やかで平和を感じさせる不思議な町であった。この町の道路は白いレンガや石のブロックで構成されていて、町の所々で人工的に造られた小川や噴水などが見られ、小さな滝などもあり、清涼感の漂う居心地の良い所だった。

「うわあああ、キレイ」

「遠くから見た景色とは、全然違っつて言っか違う場所に來たみたいだ」

「俺、この町大好きだなあゝ始めて來たけど懐かしい気がする」

アス力達は感動の声を上げた。辺りを見回した後、目を正面に向けると遠くから見た物と同じであるうビルがアス力達の目に映った。

「あつあれが、本部？」

「はい、あのビルの最上階にダーヴァ総司令官がいるはずです。さっ行きましよう」

「おつきゝい。流石ホーリーナイツの本部今までのビルとは違っつ断然大きいね。すごいなあゝ」

「よっしゃつ、行こうぜ！！」

アス力は勢いよく走り出した。それに一同はついていき、本部のビルに入っつていった。

「ルーク准将、最上階にて総司令官がお待ちです。入室許可は出ているので、部屋の前にいるガードの人にこのカードを見せれば通してもらえます」

「わかりました。・・・さあ皆さん、受付も終わりましたし、上に行きましよう」

階段やエレベーターを使い、上まで一同は上っつていった。

「はあああああ・・・ここの階段きつかったな・・・」

「すみませんねえ、変な造りで。総司令官の趣味というかなんと言  
うか、健康には気を使う方なのでこれも健康の為と言ってわざわざ  
造り直したんですよ。階段だけ……」

ルークは何かを思い出すかのように言った。どうやらこの階段はホ  
ーリーナイツの隊員達の手によって、リフォームされたらしい。

「ここですね」

「カードキーを、ルーク准将」

ガードの男がそういうと、ルークは先程の受付嬢から受け取ったカ  
ードキーを男に手渡した。

「ピッ……ロック解除。ドアが開きます」

「どうぞ中へ」

装備していた武器をガードの男のに預け、中へと一同は入った。す  
ると、窓の前にある高そうなイスに一人の男が座っていた。

「遅かったね、ルーク准将。私は待ちくたびれてしまったよ。何か  
あったのかな？」

微笑みながら淡々と言いたい事言うダーヴァにルークは、「何もあ  
りませんでした」と嫌味な笑顔で答えた。

「まったく、君はマイペースなのか、ただ単に遅刻が癖なのかわか  
らないよ。はっはっはっはっはっは」

笑うところじゃないだろう……。アス力は心の中で小さく呟いた。  
「それより、ダーヴァ総司令官。我々をここへ呼んだということは、  
何か用があるのではないですか？」

ルークが本題を切り出すと、ダーヴァ先程とは違う真剣な目つきで  
口を開いた。

「……単刀直入に言う、先日イビルナイツ最高司令官のヴァイス  
総司令官から宣戦布告の通知が届いた」

「!!!!!!」

第三十四話、ホーリーナイツ本部（後書き）

次話『宣戦布告』

### 第三十五話　宣戦布告

「宣戦布告！？つまり、近日中に戦争が起こるってことなのか？」  
あまりにも突然過ぎた為、アスカもクレアもハロルドも、ルークですら驚きの表情を隠せなかった。

「そのとおり。我々も近いうちに決着をつけようと思っていたところだったのな。これで戦う理由が出来たということかな」

「それで、俺達を呼んだってことは、俺たちにも戦争に参加してくれるってことなのかな？」

「ご名答、そのとおりだよ。えっと名前は確か、ハロルド君だったかな？」

ハロルドは、にこつと微笑みながら「はい」と言った。しかし、ハロルドの表情には、いつものあどけなさはなかった。

「そうか、君があのだ・・・」

「総司令官さん、そこから先は言わないでくださいねえ」

「・・・そうか、すまなかったな」

「？」

「なんでだ？ハロルド」

「なんでもないよ。気にしない気にしない」

一同は、気になる気持ちを抑え、本題へと話を戻した。

「あの、それで決戦の日はいつなんですかあ？」

「君はクレアさんかな？決戦の日は、2週間後になる。各自準備を急らないように」

「了解しました。他の隊にはこのことは連絡済なんですか？」

「無論、君が一番最後だよ。それから一つ頼みごとがあるのだが・・・」

「・・・そうでしたか。で、頼み事とは？」

ルークは軽く笑いながら、話を聞いた。

「今週中に完成する予定の魔導砲の魔力増幅装置に使用する筈のマ

ジックストーンと呼ばれる鉱石が足りないようだな、すまないが採りに行って来てくれるかな？」

「場所はどこですか？」

「アレクトリア鉱山地帯だ。行き方はわかるな？」

「・・・了解しました」

「失礼しました」そう言ってアス力達はダーヴァのいる部屋を後にした。

「魔導砲ってなんだ？」

「魔導砲と言うのは、今我々の研究チームが開発している兵器のことです。使用者の魔力を魔力増幅装置に集めて、高密度の魔力をエネルギー弾へと変換して敵を攻撃するんです。魔力増幅装置に込められた魔力は、エネルギー弾に変換する前に魔力増幅装置内で高圧力で圧縮し、エネルギー弾として発射されます。弾数は使用者の魔力の量、つまり、魔力の量が多い者ほど有利になるんです。アス力にはピッタリの武器ですね」

「へえ〜なんだかわかんないけど、すげえ武器なんだな魔導砲ってのはさっ」

「さっ日没までにアレクトリア鉱山地帯付近へ行きましょう。この時間帯ならまだ日の沈む前には到着できる筈です。鉱山地帯の近くに鉱山の町アレクトリアがある筈ですから、今日はそこで一晩過ごしましょう。マジックストーンは採取量が多くは無いのでなるべく早くから作業に取り組まないと決戦に間に合いません。期限は大体一週間、それ以内に必要な分採取できるように心掛けて置いてください。それと採取中は坑道内に入る訳ですが、魔物の出現の可能性もありますので、戦闘が起きてもいいように各自注意しておいてください」

「じゃあ〜出発」

クレアの掛け声と共に、アレクトリアへと向かう一同であった。



第三十五話、宣戦布告、（後書き）

次話、『鉾山の町』

### 第三十六話　鉾山の町

それから二時間後、夕日も大分傾いてきたところに、四人は鉾山の町『アレクトリア』に到着した。

この町はアレクトリア鉾山地帯で武器や防具の加工などに使う鉾石の発掘等を行うもののために作られた、比較的新しい町である。

町ができる以前は、発掘者たちは就寝や食事も鉾山内で行っていた。ほぼ24時間、鉾山内にいたのである。そのため魔物に襲われる率が高くなり、アレクトリア鉾山で発掘をするものは次第に少なくなっていた。

しかしアレクトリア鉾山は数少ないマジックストーンが採取できる鉾山である。

何とかできないかと考えた末に、鉾山の近くに町ができたのだ。

そのおかげで発掘者たちは発掘作業中以外は町にとどまるようになり、魔物に襲われる率も減った。

もちろん魔物が鉾山内に多数存在しているのは確かなので、まったく襲われないというわけではない。むしろ弱い魔物ならばよく出てくる。

が、それらは油断さえしなければ一般人でも倒せる本当に弱い魔物なのだ。

今までは食事中、睡眠中を襲われ、弱い魔物相手でも命を落としてしまう発掘者が多数いたが、町ができた今は、それもあり少なくなっている。

しかし鉾山内にはごく稀に強い魔力を持った魔物が現れることがある。めったに出てはこないのだが、運悪くそんな魔物に当たってしまったときは、あきらめるしかない。

もしくは、町で用心棒を雇うという手もある。腕は立つが仕事がないというものがこの世には結構いる。この町にはそんなものたちが集まってくる。なぜなら、この町でなら鉾山内でのボディガード

という、自分達の力が役に立つ仕事がもらえるからだ。この用心棒がいれば、もしも強い魔物に出会っても、逃げ切ることぐらいはできる。

この用心棒達のおかげで、鉱山内で魔物に殺されるものは、もうほとんどいない。

それはやはり、この町の功績によるものが大きいと言えるだろう。

「うわゝ。みんな泥だらけで、ご苦労様って感じだね」

「鉱山内は、汚れますからねえ。これから私たちもあのようになり  
ますから」

「作業用の服でも買っておいた方がいいんじゃないか？」

「賛成だね。俺も服汚れるのイヤだもん」

「私も同感です。まず、服を買いに行きましょう。」

「じゃあ、あそこに見える洋服屋さんで、買い物しようよ」

それから1時間ほど経ち、それぞれが買ってきた服を着ていた。

「どう？このワイルドで丈夫そうな服はっ！！」

「おっいいですねえ。アス力は、服のセンスがいいんですね」

「そういうルークも似合ってるわよ。その作業用のつなぎ」

「クレアちゃんも可愛いよ、でも鉱山で働くにはちよっとねえ・

・

「えっそう？ばっちり働けそうなんだけどなあ」

「どう考えてもそれは作業には不向きだろう」一同の心は一瞬一つ  
になった。

「ハロルドは、アス力に似てますねえ」

「あっこれね、アス力君と一緒に選んでもらったんだあ」

「どうだっ！！なかなか似合っているだろう？」

「すごい似合ってるよ！！アス力！なんで私の服も選んでくれなかつたの？」

「えっあっいやその、ねえ。女の子の服って選び難くて・・・」

「さっ 宿へ向かいましょう。日がすっかり暮れてしまいましたし、  
なにより服選<sub>び</sub>に疲れてしまいました」

「そうだなっ、俺も疲れたよ。今日はもう休んで明日からしっかり  
働いて、さくつと任務終わらせちまおう」

一同は宿へ向かい、体を休めた。

第三十六話 鉾山の町（後書き）

次話『古びた坑道』

### 第三十七話　古びた坑道

「あー、疲れたー！」

アスカは宿に着き、自分の部屋に入ると、ベッドにそのままダイブした。

「自分で言うのもなんだけど、将来的にはスタイリストにでもなれるんじゃないかなあ？」

先程褒められたことに、自信を持ち冗談交じりの独り言を、アスカはこぼした。

ベッドに寝転がりながら、アスカはダーヴァが言った言葉を何度も頭の中で繰り返していた。

『・・・単刀直入に言う、先日イビルナイツ最高司令官のヴァイス総司令官から宣戦布告の通知が届いた』

「戦争が始まる・・・」

そう考えると、何だか、自分の体が熱っぽくなるのを感じる。

語彙の貧弱なアスカは、自分の気持ちをうまく言葉にできない。

簡単な単語で言うならば、それは興奮と不安の入り混じったものだった。

イビルナイツとの戦争。

もちろんそれは命がけのものになるだろう。もしかしたら、アスカだって死んでしまうかもしれない。不安だ。

しかし、それとは逆に興奮している自分もいるのだ。

自分がどこまで戦えるのか試してみたい。そんな気持ちが、アスカの中にはあった。

不安と興奮、興奮と不安。

相反する二つの気持ち、アスカの中で交じり合っていた。

アスカは天井を見上げ、ぎゅっと拳を握り締める。

しばらくして拳をゆつくりと開くと、アスカは小さくため息をついた。

いくら悩んでも仕方のないことだ。それは、わかっていることなのに悩んでしまう。不思議な気分だ。

そんなことを呟きながら顔をパシッと叩き、気持ちを切り替えた。

もう寝よう。明日は早い。

アスカは目を瞑った。

翌朝、乾いた日差しが、アスカの顔を照らした。和みを感じることの出来ない光だった。

「こんな朝日もあるんだな・・・」

アスカはゆつくりと目覚めた。

「さて、着替えて支度するか」

アスカが着替えようと寝巻きを脱ぎ始めると、ドアを誰かが叩いた。

コンコン・・・

「アスカ、起きてる？」

「ああ、起きてるよ」

「みんなもうご飯食べてるよ！！着替えたらロビーに来てね」

「はいはい」と

返事をする、またゆつくりと着替えをアスカは始めた。

「おはよう、アスカ君っ！！」

「ああ、おはよう」

ハロルドにアスカは静かに挨拶をした。

「おや、アスカ元気がありませんねえ。具合が優れないんですか？」

「いや、戦争前だからさ、いつまでもはしゃいでられないなっと思っただけ・・・」

「はしゃぐのと元気がないのは違いますよ。今のアスカは元気がな

いだけです。そう深く考えても仕方ありません。

今は、今やるべきことにだけ集中しましょう。戦争まで時間はまだあります」

「そうだな……。けど、やっぱりすこしは先の事を考えないと」

「まあ確かにね、私たちもいつまでもへらへらしてられないよね」

「ルークさんとはとかく、俺やクレアちゃん、アス力君は戦闘慣れしてないしね」

「まあ、坑道内は魔物が出ますし、戦い慣れするのにはそう時間は掛からないと思います」

「それは、いいんだけどさ。強過ぎる魔物は出てきて欲しくないなあ」

「弱い者と戦い続けても、強くなれません。自分より強い者と戦う事でその強い相手から沢山の事を学ぶのですよ」

「まあ、強いのが出てきたら、それはそれでやるしかないよっ」

「ああ、そうだな」

「さて、そろそろ坑道へ向かいましょう!!」

一同は支度を済ませ、マジックストーンが最も多く発掘できると言われている「古びた坑道」へと向かって行った。



第三十七話 古びた坑道（後書き）

次話 『坑道内』

### 第三十八話　坑道内

坑道内は、数メートルおきに壁にランタンがともしてあり、人の手が加えられているのがよく感じられた。

この「古びた坑道」は最もよくマジックストーンが取れる場所ということで、やってくる発掘者も多い。

他の坑道がどうなっているのかは知らないが、少なくともこの坑道内においては、明かりの保障はなされているようだ。

「ね、そういえばさあ」

坑道内を歩きながら、クレアが不意に声を上げた。

「この坑道、一週間くらい前に、行方不明者が出たらしいよ」  
クレアの言葉に3人は驚いたような顔を彼女に向けた。

「あ、これ、別に正確な情報ってわけじゃないんだけど、町の人が話してるの、たまたま聞いたやつなんだ」

「この坑道内で行方不明事件・・・、知りませんでした」  
ルークが少し難しい顔をして呟いた。

だがその情報をルークが知らなかったのは、仕方ないことだった。もともと魔物が出る危険性があるこの鉱山で、行方不明者が出たところでそう珍しくはないのだ。

魔物に殺される率は確かに以前と比べて格段に減っているが、それでも他の地に比べれば、その率が高いのには違いない。

だから行方不明者が出たところで、町ではそう大きな話題にもならないのだ。

まして行方不明からもう一週間たっている。

町のものたちは、もうほとんど行方不明者のことなど話題にしない。クレアがたまたま情報を聞いたことが、幸運だっただけなのだ。

「ここで行方不明ってことは、多分その人もう死んでるよね」  
ハロルドが言った。

そう。この鉱山で行方不明は、すなわち死を意味する。

おそらくこの坑道内のどこかに、行方不明者の死体が転がっているはずだ。

「行方不明者は二人いて、一人が発掘者、もう一人が用心棒だって二人と同行していて、命からがら、唯一逃げ出すことができた発掘者の人の弟子がいろいろ証言してるみたい。その人の話によると、二人は魔物に殺されたんだって。だから一応行方不明者扱いになってるけど、二人ともほぼ100%、死んでると思う」

「用心棒がいて、それでも殺されたのか」  
クレアの言葉を聞き、アス力が呟いた。

この町にいる用心棒たちは、みな腕が立つものばかりだという。事実、この村に用心棒が居つくようになってから、坑道内での死亡率はぐんと減ったのだ。

そんな用心棒がついていても、殺される相手。

そんな魔物が、この坑道内にいるのだ。

アス力は、小さく握りこぶしを握った。

「あれ、どうしたんでしょう？」

ふと先頭を歩くルークが立ち止まり、首をかしげた。

「どうしたんだよ？」

「ここから先・・・ランタンが一つ残らず破壊されています」

ルークに言われて前を見てみれば、確かに、今アス力たちが立っているところから先に、ランタンはひとつも無かった。そして地面に、無残に砕かれたランタンの残骸が見える。

「なんか、壊れてるってよりも壊されてるって感じだねえ」

「うん・・・、私達に、これより先には入るなって言っているみたい・・・」

「マジックストーンの採掘場所まではもうすぐですが・・・進みますか？」

ルークは確認するように3人に言った。

「もちろん！」

「当たり前だよ！」

「ここまで来て帰れるか！」

3人は引き返す気などさらさらないらしい。

ルークは苦笑し、そして壁にかけてあったランタンをひとつ手に取った。

「では、行きましょうか」

4人はたった一つのランタンを頼りに、暗闇の奥へと進んでいった。

第三十八話、坑道内、（後書き）

次話、『魔物』

### 第三十九話　魔物

「暗いなあ・・・ったく、これじゃあ戦いにくくて仕方がねえよ・・・」

アス力が吐き捨てた。アス力がそういうのも仕方がないだろう。ルークの持っているランプの明かりしか、辺りを照らすものは、無いのだから。

数メートル先は見えるものの、そこから先は何も見えない。敵が来たらとてもじゃないが、反応できないだろう。

幸い、ここまでは一本道で、迷う事はなく、前後にだけ気をくばしていればよかっただけだった。

「それにしても、どこまで続くんだろう。この道は・・・」

クレアが周りを見渡しながら言った。クレアは、いつもよりも警戒しているようだ。それは、魔物に対する警戒ではなく、暗闇そのものの自体への警戒だが。

「・・・むこうに、明かりが見えますね・・・行ってみましょう」  
ルークの目の先には、確かに明かりがあった。それは壁にあるランプの明かりなのか、アス力達以外の誰かが持っているランプの明かりなのか、まだわからないが確かにそこで光っている事には間違いなかった。

恐る恐る近づいてみると、壁にあるランプが辺りを照らしていた。

なぜか、ここから先はランプが壊されては、いなかった。

「なんで、ここは壊されていないんだろうねえ・・・誰かが意図的にやったとしか思えないよねえ」

ハロルドの言葉に誰も反論しなかった。いや、しなかったのではなく、できなかったのだろう。そう考えざる負えない状況なのだから。

「でも、ここから先のランプが壊れてないってことは、ここから先になにかあるってことなんじゃねえの？」

「ええ、その可能性は十分ありますね。もしかしたら、白いコート

について何かわかるかもしれません」

「よし、先へ進もう!!」

数十分ほど歩き続けていると、明かりが、一層増した部屋へとたどり着いた。

「なんか、ここ知っている気がする・・・」

「えっ？」

「いや、なんでもない」

アスカがボソツと口にした言葉が引っかかるクレアだが、あえて聞かなかった。

奥に何やら、大きなものがあつた。ハロルドがそれに気が付き、一同は、駆け寄って行く。

「・・・・・・これはっ!!」

「どうしたんだ？何かわかったのか？」

「これは、おそらく封印の像です。これは推測ですが、魔王アシュドの魂が封印されていた可能性が極めて高いです。それは、この魂の鎖から推測されます」

「魂の鎖？」

「はい。これは特定の人物の魂を縛りつけ、封印すると言う、古来に存在した封印術に使用する道具です。この封印術は、魂と肉体と魔王アシュドの場合は『魔力』ですかねえ、とにかく、封印する対象の最も発達したものの、3つに分けてからそれぞれを封印するんですよ」

「なるほどねえ・・・それじゃあここには、魂が封印されてて、他の場所に、肉体が封印されてたんだ。しかも、この様子だと、魂の封印は解かれているねえ。魂の封印が、解けてるってことは、少なくとも肉体も復活してる可能性が高いよねえ」

「はい。つまり、この世にはあの恐ろしい、魔王が蘇ってしまったと言う事です。しかし、彼の魔力は、蘇っているかはまだわかりませんね。封印が解かれたのは最近のようですし。しかも、魔力の封

印の仕方は、私も知りませんし、対策を練るにも練れません。困りましたね・・・」

ルークとハロルドで、難しい会話しているのにアスカとクレアは理解できず、途方にくれていた。

「なんか、2人が違う次元の人に見えてきたよ。すごい深刻なのは伝わってくるんだけど、意味がイマイチわからないよぉ・・・」

「ハロルドって、時々すごい奴に見えるよなぁ。いつもは、子供っぽいのにさっ」

アスカ達が、ルークとハロルドの会話をボーッと聞いていると何かがある気配を感じ、咄嗟に横へ回避した。

すると、大きな岩の塊のような巨人が手に大きな棍棒を持ち、それを振り下ろしてきた。間一髪避けていなければ、今頃アスカはペシヤンコになっていただろう。アスカは体勢を立て直し、剣を即座に構えた。



第三十九話、魔物、（後書き）

次話、『新技』

## 第四十話　新技

「あつぶねえーなあコノヤロウ!!」

「こいつは、ゴーレムですね……。それにしてもアスカ、よく避けましたねえ。私はもうてつきり、潰されてしまったかと思いましたが」

ルークが嘲る様に笑った。アスカは、「あつそう」と言わんばかりの表情を浮かべた。

「いくぜえ!!」

勢いよくアスカが前へ飛び出し、ゴーレムの懐へ飛び込んだ。

「食らつとけ、『龍波』!!!!」

アスカの正義の魔力が、竜王の刃から放たれる!!……が、アスカの龍波は、ゴーレムには効かなかった。

「こいつ、見かけ通りすっげえ硬いんですけどどうするんだルーク!!」

アスカが溜め息を吐きながら、ルークに尋ねた。

「今私は、このゴーレムから逃げる作戦を考えたのですが、そういう訳にはいなくなりました。見てください、彼の背中を」

ルークに言われたとおりに、見てみるとゴーレムの背中には、マジックストーンがくっ付いていた。

「もしかして、マジックストーンって、なかなか見つからないんじゃないかって、なかなか取れなかった……。いや取る事ができなかったんじゃないのかな?」

「たぶん、そうだろうな!!」

アスカがゴーレムの攻撃を防ぎながら、クレアに答えた。

「クレア、ルーク、援護頼む!!」

「了解!!」

2人同時に返事を返した。

「集え水よ、今一つとなりて、その恐ろしさを見せつけよ!!」『ス

ブラッシュ』！！」

「集え光よ、今一つとなりて、彼の者を貫き給え！！」ライトアロ  
ー！！！」

水が勢いよく、宙を駆け抜け、ゴーレムにダメージを与えた。そこ  
へ、クレアの放った光の矢がゴーレムを貫いた。

「ぐおおおおおおおお！！！」

ゴーレムが地響きのような、声を上げた。

「倒したのか？」

「いやまだですっ！！！」

「炎よ、我が剣に宿り、その力を貸し与えよ！！」『フレイムソード』  
！！！」

ハロルドが、自らの呪文で、剣に炎を宿し、ゴーレムに斬りかかっ  
た。

「だあああああ！！！」

ハロルドの攻撃によって濡れていたゴーレムの体は急に乾燥し、そ  
れにより崩れやすくなった。

「今だよ、アスカ！！今ならこいつの体も脆くなって倒しやすいは  
ずだよ！！！」

「そんなこと言っただって、硬すぎて龍波が効かないんだ、どうしよ  
うもないだろ！！！」

「龍波をもっと、一点に集められればいいんじゃないかな・・・？」  
クレアの一言で、あることをアスカは思いついた。

「そっか、龍波の魔力をもっと一つに集めて鋭くすれば・・・」

そう呟くと、アスカは7、8歩後退し、勢いよくゴーレムに突進し  
た。

「食らいやがれ！！」『龍波衝』！！！！」

剣でゴーレムを突き刺すように、剣を前突き出した。すると、いま  
で拡散していた魔力が、一点に集まりゴーレムの体を貫いた。

「ぐおお・・・がああ・・・おおおお・・・」

ゴーレムが崩れるように倒れた。

「へっ!!どんなもんだ!!」

アス力が誇らしげに言った。それを見たルークは、少しあっけに取られた。

「この短時間の戦いの中で、新たな技を自ら生み出すなんて・・・この子はもしかすると恐ろしく強くなるのでは・・・」

こうして、見事にアス力達はゴーレムを倒すことができたのだった。

第四十話、新技、（後書き）

次話、『命』

## 第四十一話 命

ゴーレムを倒したことによりマジックストーンを得ることが出来たアスカたちは、とりあえずそれを持っていったん外へ出ることにした。

今回入手したマジックストーンは、量から見れば、課せられたノルマを十分満たすものであった。

「これだけあれば、十分だよねえ」

「ええ。予定より早いですが、これで任務は完了です。今日は町の宿屋に泊まって、明日マジックストーンを本部まで届けましょう」  
そんな会話を交わしながら、外へ向かって歩いていこうとしたアスカたちだったが、ふとクレアがその場で足を止めた。

「どうしたんだ、クレア」

アスカが聞くと、クレアは崩れ落ちたゴーレムの後ろのほうを指差した。

「あれ・・・人の死体じゃない？」

その方向を見てみると、確かにそこに人らしき姿のものが、うつぶせに倒れているのが見えた。

それは二つあった。

「もしかしてさっきクレアちゃんが言ってた、行方不明者の人たち？」

ハロルドが呟いた。

四人はとりあえずそちらの方まで行ってみた。

「あつ、あの・・・大丈夫ですかあ？」

クレアが真っ先に駆け寄って声をかけた。

しかし、それはまったく反応を示すことはなかった。

もう一人のほうも、ぴくりとも動かない。死んでいるのは間違いないだろう。

その証拠に、その体は赤黒い血にまみれていた。

「とりあえず町まで運びましょう」  
ルークの言葉に従い、アスカとハロルドが一人ずつ背負い、町まで運ぶことにした。

結果から言うと、その二つの遺体は、やはり発掘者と用心棒の、行方不明になった二人組みだった。

町の役場まで運び、命からがら逃げ出した弟子の人に確認を取って見たのだ。

弟子は発掘者の方の遺体に縋り、号泣していた。

師匠、と何度も何度も繰り返しながら、決してそのそばを離れようとしなかった。

「・・・・・・・・」

アスカは無言でその様子を見ていた。

弟子の悲しみように、人の命の重さというのを感じたような気がしたのだ。人一人が死んだだけで、これだけ悲しむ人がいるということに。

そしてもうすぐ、人の命を大量に奪うことになる戦争が始まる。

「アスカ？」

黙り込んでしまったアスカに、心配そうにクレアが声をかけた。

「どうしたの？」

「あ、いや、何でもねえよ」

アスカは出来る限り平静を装い、笑顔でクレアに言った。

「よし、それじゃあ宿を探そうぜ！」

アスカはつとめて明るい声を出しながら、ルークとハロルドのほうへ歩いていった。

第四十一話、命（後書き）

次話、『臨時休暇』



## 第四十二話　臨時休暇

コンコン・・・

「開いているよ。入りなさい」

「失礼します。マジックストーンの採取に成功しました」

「すまないなあ。こつちも人手が足りなくてね」

「いえ、構いませんよ。命令ですからね」

「ん？アスカ君。その剣を見せてくれるかな？」

突然のことに、アスカは少し戸惑ったが言われるままに剣を渡した。

「だいぶ剣の刃がこぼれているね」

「は、はあ・・・」

「ここへ行ってみなさい。ここには優秀な鍛冶職人がいる、この手紙を渡せば無償で剣を鍛えてくれるはずだ」

「えっあ、はい。わかりました」

「それと、これを持って行きなさい。きっと、役に立つだろう」

そう言うとき、ダーヴァは、先ほど手渡したマジックストーンの欠片をアスカに渡した

「あつありがとうございます」

「なに、気にすることはない。これは報酬だよ。はっはっはっは  
っはっはっは」

なんなんだ、このオッサンは・・・　そう心の中で呟くアスカであつた。

「戦争まであと一週間をきつた。各自準備を怠らずにな。それから戦争の前日まで君たちには休暇を与える。家に帰って事情を話すといいだろう。もっともクレアちゃんとハロルド君は戦争に参加する義務はない。戦争が終わるまで実家に帰っていても構わない。命は大切にしないでな」

「失礼ですが、俺には帰る家はありませんよ」

ハロルドは笑顔で答えたが、そこには温かみはなかった。

「あの、私も参加させていただきます！！アス力だけ行かせるなんて心配で心配で・・・」

「クレア・・・」

アス力は少し嬉しかった。人にこんなにも思われているんだという事を実感できたからだ。

「はっはっはっはっは。そうか、ならば君たちの活躍と健闘を祈らせてもらうとするよ」

「ありがとうございます。では、失礼させていただきます」

「おっと、大事な事を言うの忘れていたよ。前日の正午に作戦会議を始めるのでな、それに間に合うようにしてくれたまえ」

先に言えよ・・・全員が呟いた。アス力の顔は心の声があふれんばかりの表情をした。

「あのおっさん、わけわかんねえーよ・・・なんか精神的に疲れるわ」

「まあ、いい人なんだけどね。謎なところが多いよね」

「昔はもつと鬼のような人だったんですがね、ここ数年で穏やかになってしまいました。それより、アス力の剣を鍛えてもらいに行きましょう。あまり時間もありませんし、急いだ方がいいですね」

「そうだな、よし鍛冶屋さんに向かおう！！」

第四十二話、臨時休暇、（後書き）

次話、『鍛冶屋』

#### 第四十三話　鍛冶屋

その鍛冶職人の店は、サンライトタウンの西端にひっそりとたたずんでいた。

都会的なこの都市において、そこだけが異様な雰囲気醸し出している。

鍛冶職人の店は森の中にあったのだ。

ただ森といってもそれほど大きなものではなく、せいぜい普通の家の敷地よりやや広いぐらいの面積だ。

そこにびっしりとほとんど隙間なく、木やら草やらがぼうぼうに生えていて、店に入り口に続く道以外は、ほとんど森　いや、ジヤングルといってもよい状態であった。

この都市において、こんな奇妙な建物は他にないだろう。

アスカたち四人はその店の前でしばし呆然としていた。

「なんだよ、このジャングルみたいなのところは……」

「噂ではその鍛冶職人は変わり者であるとのことでしたが、ここまでは……」

流石のルークも、この景色には開いた口がふさがらないようだ。

「とりあえず、中に入ってみようよ」

クレアの言葉に、四人は余り気が進まなそうにしながらも、木々に囲まれた入り口への道を、歩き出した。

「お話はダーヴァ総司令官から聞いています。どうぞこちらへ」

店に入ったアスカ達を迎えたのは、意外にも若い女性だった。

女性の割には背が高く、背筋もちゃんと伸びた、しっかりしていそうなお感じの人だ。

「あの、あなたがここの鍛冶職人さんなんですか？」

クレアが聞くと、その女性は微笑んだ。

「とんでもありません。私などまだまだ未熟者です。私はこの鍛冶職人の弟子なんです」

「お弟子さん、ですか」

弟子であるということは、彼女も鍛冶職人を目指しているということである。

鍛冶職人はほとんどの場合男性であるので、四人は目を丸くした。

「そういえば、あの庭なんですけど……」

「ああ、見てもらえました？ 師匠は自然を愛する方ですので、私が師匠のために庭にたくさん植物を植えたんです。喜んでもらえると思ったんですけど、師匠はちよつと呆れたように私を見てくるんですよね。何故でしょう？」

そりゃ、自分の店の庭をあんなジャングルみたいにされたら呆れもするだろう。

どうやらこの女性、しっかりしているように見えてどこか抜けているらしい。

「あ、では師匠を呼んでまいります」

その女性はアスカたちに一礼すると、店の奥へと歩いていった。

第四十三話、鍛冶屋、（後書き）

次話、『新しい剣』

#### 第四十四話　新しい剣

「待たせたの。わしがここの鍛冶職人のオレーグじゃ」

店の奥から出てきたのは、年配の老人だった。

おそらく70は超えているだろうと思われるが、顔つきが鋭く、精力に満ち溢れている感じで、歳を感じさせない。

「先ほど対応させたのがわしのたった一人の弟子、ローラじゃが、何か粗相はしていないかの？」

「いえ、とても暖かくもてなしていただきました」

「それはよかった。では早速、その問題の剣を見せてくれ」

オレーグに言われ、アスカがその剣を差し出す。

オレーグは差し出された剣に顔を近づけ、それを観察する。

「ふむ、いい剣じゃな。刀身が滑らかで、美しい光沢を持つておる。だがやはり、少し刃こぼれしているようじゃな……。分かった。少し待つていてくれ。そうじゃの、数時間で終わるじやろ。それまでどこかで時間をつぶして待つていてくれ」

オレーグはそう言っと、アスカたちの返事も待たず、足早へ店の奥へと消えていった。

急ぐようにして行ってしまったオレーグに、アスカたちが驚いていると、

「師匠ったら、骨のありそうな剣を見つけると、いつもああなんですよ」

と、今まで脇に控えていたローラが苦笑混じりに言った。

「では、師匠の言うとおり、終わるまでには数時間かかるでしょうから、それまでどこかで暇でもつぶしててください」

ローラが立ち去ろうとした時、アスカがある事を思い出し道具袋を出した。

「ローラさん、これをオレーグさんに渡してもらえますか？」

そう言ってアスカは、ダーヴァから渡されたマジックストーンの欠

片をローラに手渡した。

「わかりました。渡しておきます。では、私も師匠を手伝うのでこのへんで」

そういうと、ローラもオレーグを手伝うために、店の奥へと消えていった。

オレーグの家を後にした一同は、剣が出来上がるまでの時間潰しについて話し合っていた。

「どうするよ？この中途半端な時間」

「そうですね、あまり遠くへはいけませんし・・・」

「やっぱり、この町を見て回るのが一番いいと思うんだけど」

「俺も、クレアちゃんの見聞に賛成かな」

「・・・そうですね。アスカの剣が鍛え終わるまで自由時間としましょう」

そう決まったとほぼ同時にハロルドはどこかへ行ってしまった。

「あいつ元気だなあ〜」

アスカが微笑むように笑うと

「へえ〜、アスカもそんな顔するんだねっ！！初めて見たよ！！」

クレアが笑いながら話しかけてきた。

「別に〜。いつもどおりじゃねえ〜か？」

「ふふっ　そおかなあ？」

「なんか機嫌いいな、クレア」

「別に〜」

2人が楽しそうに会話していると、ルークが口を開いた。

「では、私も行きますね。私はホーリーナイトの本部へ戻りますから、何かあったら本部へ来てください。それでは・・・」

「ああ、わかった」

そう言つと、ルークはスタスタと歩いていった。

どんな風に仕上がるのか少し楽しみだな。俺の新しい剣・・・



アスカは少し胸に期待を持ちながら口を開いた。

「とりあえず、街の方に行ってみるか」

「うんっ!!」

2人は、町へと歩いていった。

第四十四話、新しい剣（後書き）

次話、『魔龍』

## 第四十五話　魔龍

「ねえ、アスカ。私洋服が見たいんだけど」

「ああ？この間買ったばかりじゃなか？」

「いいから、いこつ！！」

そう言うときアスカはアスカの腕をグイグイと引っ張った。

「わかったわかった。引っ張らなくてもちゃんとついて行くから」

「早く早くっ！！」

こうやってクレアと遊んだり、笑ったり、話したり、一緒にいたりするのでこれで最後になるかもしれない・・・。

そう考えると切ない気持ちで心が溢れ返ってしまい、アスカの顔から少しずつ笑顔が消えてった。それはクレアも同じであった。

その後、洋服を見に行ったアスカ達は、食事をとり街を見て回り日が暮れるころにオーレグの家へと戻ってきた。

「遅いよ、アスカ君。クレアちゃん」

「人を待たせるのは、感心しませんね」

「ゴメン、ちよつと遠くまで行き過ぎた！！」

「ごめんなさい。私が無理を言ったから・・・」

反省する2人を見てルークが口を開いた。

「まあ、いいでしょう。さっ、中へ入りましょう」

「おう！！」

「お待ちしておりました。作業の方は完了いたしました！！師匠もなかなかのできたと言っております」

「忙しい中、申し訳ありませんでした」

「いえ、お気になさらないでください。それより、師匠が呼びです、こちらへどうぞ」

ローラに導かれ、オーレグのいる部屋へとアス力達はやってきた。

「剣はできたぞ。そこにある箱にしまつてある。開けてみるといい」  
言われるままにアス力は、ふたを開け中身を取り出した。

「これが。俺の新しい剣・・・」

アス力が鞘から剣をゆつくりと引き抜くと鈍く光る鋭い刀身が見えた。

「そいつぁ、前の剣よりも軽量化して一振りの反動を少なくした。前よりも早く動けるだろう。ただ、剣自体のパワーと強度は落ちてるから剣に頼った攻撃、防御は避けるんだ。剣で攻撃を防ぐんじゃない、体全体で避けるんだ。でないと簡単に折やられる。いいな？」

「おう！！」

アス力は、軽く二振りほど剣を振るとゆつくりと剣を鞘に収めた。

「おっと、大事な事を一つ言い忘れてた」

「ん？大事な事？」

「そうだ。その剣の柄と刀身に『マジックストーン』を埋め込んでおいた」

「だからどうなんだ？」

「マジックストーンは吸収した魔力を増幅させる増幅器のようなものだ。つまり、今までの龍波から放たれていた魔力が増幅され、さらに強力な龍波が打てるようになったという事だ」

「なるほど。それで総司令官はこれを・・・」

ルークが口開いた。どうやらマジックストーンを託した意図が掴めていなかった様だ。

「最後に、その剣の新たな名だが・・・」

「竜王じゃないのか？」

「マジックストーンによって魔力を肥大化させる剣。よってその剣を『魔龍まりゆう』と称す！！」

第四十五話、魔龍、（後書き）

次話、『故郷』

## 第四十六話　故郷

「さて、ではこれからどうしますか？」

オーレグによって剣を強化してもらったアスカたちは、彼に礼をいい、店の外へと出てきていた。

あの不気味なジャングルを視界に入れないよう努めながら、四人はこれからの行動について話し合うことにしたのだ。

「休暇はあと四日ほどありますけど」

「ダーヴァさんは、家に帰ってみるといって言ってたよね」

クレアの言葉に、アスカは故郷の風景を思い出していた。

砂漠の町、サンラド。

時間としてはそれほど長くはないはずなのに、そこで暮らしていたころがひどく懐かしく感じた。

残してきた母は、そしてロベルトはどうしているだろうか。アスカを庇い、片腕と共に自らの夢を失ったロベルト。

彼にもきちんと今までのことを、報告したい。

「俺は、帰りたい。サンラドに」

アスカははつきりと言った。

クレアはにつこりと笑い、「私も！」と同意した。

「二人が生まれ育った町かー。興味あるし、俺も行く！」

クレアの横で、「はいはい！」と手を上げながら、ハロルドが言った。

「いいのか、ハロルド。お前も自分の故郷に帰りたいんじゃない、言いかけてアスカは、自分には帰る家がない、とハロルドが言っていたことを思い出した。そう、ハロルドは両親を殺されているのだ。」

アスカはあわてて口をつぐんだ。

「じゃ、じゃあ、ルークはどうする？　自分の故郷に帰る？」

少し気まづくなった雰囲気打破するために、クレアがわざとら

しいくらい明るい声でルークに聞いた。

クレアに聞かれたルークは、にっこりと満面の笑み（例の嫌味なやつ）を浮かべ、言った。

「アス力達についていきますよ。私の両親もすでにこの世にはいませんから」

せっかくその場を取り繕おうとしていたのに、何でこの人はこんなにも笑顔であっさりと地雷を踏むのだろう。

アス力は少し頭が痛くなった。

「それに、ロベルトにも会いたいですしね」

「ついでかよ！」

思わずツツコミを入れたアス力だった。

ジャリツジャリツ・・・ 砂を踏みしめる音と吹き付ける突風が行

く手を阻むこのサンラドの地にアス力達はいた。

「やっぱ、砂漠は大変だな。暑くて暑くて・・・」

「そうだね、いくら地元の人でも暑いものは暑いよね」

「もう暑いのがヤダー！！暑いのがうざーい！！」

「まあまあ、そう言わずに。だいたい、あなたがついて行きたいと言ったのですよ。ハロルド」

「そうだけど・・・やっぱ、暑いのはイヤだ！！」

暫く歩き続けていると、町が見えてきた。

「おっと、どうやら着いたようですよ」

「ここに来るの、久しぶりだな」

第四十六話、故郷、（後書き）

次話、『異変』



## 第四十七話　異変

ジャリッジャリッ・・・ 砂を踏みしめる音と吹き付ける突風が行く手を阻むこのサンラドの地にアス力達はいた。

「やっぱ、砂漠は大変だな。暑くて暑くて・・・」

「そうだね、いくら地元の人でも暑いものは暑いよね」

「もう暑いヤダッ！！暑いうつざーい！！」

「まあまあ、そう言わずに。だいたい、あなたがついて行きたいと言ったのですよ。ハロルド」

「そうだけど・・・やっぱ、暑いのはイヤだ！！」

暫く歩き続けていると、町が見えてきた。

「おっと、どうやら着いたようですよ」

「ここに来るの、久しぶりだな」

町はもう、目と鼻の先だというのにアス力が突然立ち止まった。

「少し寄りたい所があるんだけど・・・」

「？」

「無理ならいいんだ。ちょっと寄りたかっただけで用は無いから・・・」

「・・・そうですか。では、病院へ行きましょう。まだ、ロベルトは入院しているはずですよ。おそらく、病院で解散という形になると思います」

一向が歩き出そうとした瞬間、アス力が頭痛を片手で抑え込むかのようにうずくまってしまった。

「うああ、あああ！！いい、いてえっ・・・！！」

それは、尋常な痛みではなかった。アス力はそのまま意識を失った。

「・・・んっ、んん、こ、ここはどこだ・・・？」

あたりを見回せども真っ白な世界が続く。どこからか声が聞こえて

くる。

・・・もう少しだ・・・やっと、外へ出れる・・・

「何の事だ？お前は誰だ？」

・・・もう、こんな所には居たくない・・・早く帰りたい・・・

「こっ、答える！！」

「・・・ねえパパ、アスカ大丈夫かな？」

「ああ、命に別状は無いようだ。心配ないよ、クレア」

アスカが倒れた後、ルークたちは病院へと急いでアスカを運んだようだ。この病院はクレアの父が経営していてロベルトもここに入院している。

「何か原因はわかりませんか？」

クレアの父は難しそうな顔で答えた。

「身体に異常は見当たらないんですよ。むしろ元気なくらいで。疲労が溜まっていたわけでもなさそうなんだが・・・」

「砂漠越えで太陽にやられたとか？」

「日射病などでもなさそうなんだよ。ただ・・・」

「ただ・・・？」

クレアの父は、言葉をくもらせた。

第四十七話、異変、（後書き）

次話、『型』

## 第四十八話　型

「気になることが1つあってね」

「気になること・・・ですか？」

その場にいた一同は、唾を飲んだ。喉を鳴らしながら。

「はい。さっきの診察の時に精密な検査を行ったのですが、この子の魔力の・・・、この子の魔力の型タイプが現在では有り得ない型タイプなんですよ」

「型タイプ？」

クレアが言うところ、ルークがいつものように説明した。

「型タイプと言うのはですね、簡単に言うとも魔力の性質のようなものですかね？人や動物、魔物は必ず体内に魔力を宿します。魔力は、身体活動には必要不可欠でありなくなれば死に至ります。これは知っていますね？」

ルークは確認を取りながら説明した。説明が難しいと考え丁寧に説明しようと思ったのであろう。

「魔力には、組み合わせというものが存在します。それはそれぞれで異なり、まったく同じ組み合わせのものは存在しないといわれています。双子などでもその組み合わせが一緒になることもありません。不思議な事にその組み合わせは過去にも存在しないようです。」

「なんか途方もない話だね・・・」

「まあ、事実ですから仕方ありません。では、説明を続けます」

まだあるの？と言わんばかりの表情をクレアは浮かべた。

「組み合わせの要因としては、魔力の色(Colour)、魔力の形状(Type)などいろいろあります。私も詳しく知っていますわけでもないのですが、色と形状の説明だけしておきます。詳しい事が知りたければ自分で調べてください。資料なら貸しますので。」

「セルフなのね・・・（笑）」

「魔力の色というのは、以前話したと思いますがそのままの意味で魔力の色を示します。その色を調べる方法は以前話したやり方や最近では医薬品でも調べられるようです。色は人それぞれ異なります、例えば私なら金色ですが、一口に金色といってもそれぞれ個性を持ちます。それは明るかったり、暗かったり。眩しく光っていたり、鈍く光っていたりと様々です。つまり、似ている色があれどもまったく同じ色になることは無いのです」

「・・・な、なるほど・・・」

「次に魔力の形状ですが、現在では大きく3つに分類する事が出来ます。1つ目は、刃物のような鋭い形状です。これは、魔術や呪文の発動にはあまり適しません。アス力のような戦い方の人には適しています。今現在の一般の方はこの形状の方が多いようです。2つ目は、球体のような形状です。これは魔術や呪文を発動しやすく、アス力のような戦い方もできるオーソドックスな形状です。私もこの形状です。最後は、紙のような形状です。これは珍しく、独特の個性をもちます。攻撃にも優れ、治癒にも適します。クレアはこの形状ですね。現在ではこの3つの形状が存在します。色と同じで形状も人それぞれで異なりますが見分けがつけられる程度で分類できます。昔は他にも形状があったようですが、現在では失われた形状のようです」

ルークがやっとながい説明を終えて一息つくとクレアの父が口を開いた。

「・・・しかし、アス力の魔力の形状は異常な形状をしているんだ。基本は刃物の形状なんだが、他の形状も入り混じっているんだよ。この子が幼い頃に検査した時にはこんな形状はしていなかった。つまり、この子の魔力の形状は変化していることになる。少しずつ、少しずつね」

「てことは、新種？」

クレアは驚きながらも冷静を保った。

「いえ、新種ではありません。昔はこの形状もあったようです。た

だ、普通は二種類までしか組み合わせられないみたいですが、稀に三種類以上が混合している場合もあるそうです。ですが三種類以上の混合は、ほんの数名しか確認されていないそうです」

「書物には、これらの形状を混合体と呼んでいたと記されている」

「でも、失われた形状なんですよ？」

「はい、そのとおりです。前に読んだ資料には魔王アシウドが最後の混合体であつたと記されています。それ以降の確認はありません」

「じゃあ、なんで？」

「混合体は、混合体からしか生まれません。つまり、400年以上前に生まれていなければ混合体の誕生は有り得ませんね。しかし、アスカの誕生はここ最近です。・・・まったく、わかりませんねえ。」

「まったくです。」

今回ばかりはルークもお手上げのようだ。

「・・・くく、もうちょいだ・・・」

後ろでハロルドが不気味な笑みを浮かべた。

第四十八話、型（後書き）

次話『不安』

## 第四十九話　不安

・・・さあ、私を解放しろ・・・

「何言ってるんだよ、お前は一体・・・？」

「うわあっ！！！！」

「きやあっ！！！！」

横で寝ていたアスカが突然跳ね起きた為クレアは驚いて叫んでしまった。

「ここは、俺の部屋か・・・？」

「びつくりしたあゝ。もうお、いきなり起きないでよ」

「俺は一体・・・？」

「頭痛いゝって言って倒れちゃったんだよ。でも、なんともないから大丈夫だって言ってた」

「そっか、俺倒れちゃったんだ。」

「うん、でも元気そうでよかったあゝ。あのまま死んじゃったらどうしようかと思ったよ」

「こんなところで死んでたまるかよ。」

「ふふっ。そうだね」

「あつ、俺ちよつと出掛けてくるわ」

「えっ？もう夜だよ？」

「朝には帰るからゝゝゝ」

そう言つてアスカはクレアを1人部屋に残して飛び出していった。

「ああゝ、やっぱり夜は冷えるなあ。ああ、さみイ」

アスカは1人あのお気に入りの場所に来ていた。



さっきのあの夢はなんだったんだろう。解放しろっていったい。それに・・・なにかとても禍々しいものを感じたな。

「やつぱりここにいたあゝ」

振り向くとクレアが息を荒くして立っていた。

「なんだ、クレアか」

素っ気のない態度にクレアは、ムスツとした。

「せっかく迎えにきてあげたのにその態度は無いんじゃない？」

「迎えに来说った覚えはないけど」

アス力は嫌味つたらしく言った。

「じゃあもう帰るよ!!」

クレアは、すっかりスネてしまったようだ。

「悪かった悪かった^^;」

慌ててアス力は、謝った。それから暫くクレアに叱られたが気の済んだクレアがアス力の手をとり家へと向かった。

「じゃあ、おやすみ。アス力」

「ああ、おやすみ」

クレアと別れたアス力は、自分のベッドに入り先ほどの幻聴らしきものの言った言葉の意味を考えていた。が、しかしアス力はものの1分も経たぬ内に寝入ってしまった。

## 第五十話　珈琲

チュンチュン。小鳥の囀りが聞こえてくる。静かな朝の始まりを告げている。

「もう、朝か。さてと、今日は何するかな？」

重い体を起こしたアス力は、軽く伸びをした。ポキポキツ、ポキツ。背骨を鳴らしたアス力は、欠伸をしながら朝食を食べに1階の居間へと向かった。

朝食をとりおえたアス力が着替えをしていると母が呼ぶ声が聞こえた。

「アスカー！ー！！お客さんよ！！」

「こんな時間に客人？誰だろう？ハロルドかな？」

すばやく着替えを済ませ、玄関へ向かった。

「どちらさま？」

そう言いながらアス力は目の前のドアを開いた。

「やあ、アスカ君」

「なんだやっぱハロルドか」

そこには、ハロルドがいた。

「どうした？なんか用か？」

「いや、なんか具合悪いみたいだから元気かな？って思ってさ」  
「どうやらアスカを心配してしてくれたようだ。ハロルドは、意外と気が配られる出来る子だ。」

アス力は、ハロルドを連れて町を歩いて周った。

一方で。

「ルークさん。アスカの事なんですけど・・・」

「なんですか？」

「この間の一件で彼の魔力の色も検査してみたんですが、それが・・・」

・  
」

「？」

ルークは、コーヒーをすすりながら尋ねた。

「一体何が分かったんですか？」

恐る恐るクレアの父は、口を開いてこう言った。

「魔力の色が黒なんです。真つ黒になっていたんです。かつては暖かい紅色のきれいな色をしていたんですが・・・」

「！！！」

さすがのルークも驚きを隠せない。これは異常なことだとルークも分かっているからだ。

元来、生まれ持った魔力の色が歳月を重ねるに連れて変色するなど有り得ないからだ。

「そんな事が起こるなんて有り得ない。いや、この時点で認めざるを得ないのですが」

「はい、しかもこの色は・・・」

追い討ちをかけるかのようにクレアの父は言った。

「アスカの型は書物に記されていた魔王アシュドの型と酷似しています」  
タイプ

「はぁ・・・。何がどうなればこんな事態が。頭が痛いですが、さすがに」

「これから何が起こるかわかりません。大変申し訳ありませんがアスカからなるべく目を離さぬようにお願いしても・・・」

「はい、わかっています。それが最善の策でしょう」

・・・一体どうなっているんだ・・・

ルークは、そう思いながらコーヒーを飲みなおした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4608a/>

---

Eyes ~ アイズ ~

2010年12月25日22時21分発行